
麒麟の夜明け

Antonio della Scaiola

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キリンの夜明け

【Nコード】

N1181X

【作者名】

Antonio della Scaioli

【あらすじ】

へんてこな金属の装甲をつけたキリンの冒険。動物園が壊れ外に出たものの、塀の外は想像とはかけ離れた破壊された世界だった。降りかかる困難と対峙しながらキリンはどんどん成長していく。そして夢にまで見た海に到着したキリンは新しく出会う文化に触れながら、生き物について、この世界について、様々な答えを見つけていく。主人公のキリンが人間達の忘れかけている優しさや正しさを代弁していく。このままで本当にいいのか?! 現代日本人に問いを投げかける。

はじまりのはじまり（前書き）

動物園を襲った突然の大きな揺れ。仲間たちが次々と悲劇に巻き込まれていく。でも、事件はそれだけではすまなかった。キリンはピユアな感覚で、自分に振りかかった物語を淡々と語っていく。彼の叫びは人間達の良心に届くのか！

はじまりのはじまり

> i 3 2 5 1 1 — 4 1 3 2 <

第1章 「はじまり」

） はじまりのはじまり ）

1900・・・？何年だったかな？いや2011年だ。

極東のなすのへたのような形をした小さな国で、たいそうヤバイものが壊れた。

以来、俺はこれを着ている。まん丸でころころ。つるつるでピカピカ。

銀色に輝くボディの外觀は、なめらかな光沢を放ちながらしつとりと俺を包み込み

まるで上品なジュエリーのように、ちょっと気に入っている。

しかし、着心地はよろしくない。

足を入れる場所はなんとか4本付いているが、少し短めなのが難点だ。

大事な首も窮屈極まりない。

太さに余裕がないというか、長さに気を配っていないというか、仕上げはいまいち。

なにせおそまつだ。

そこから見ると、一見ただのガラクタスチールに見えるが、粗大ごみではない。

そう、俺はキリン。キ・リ・ン。

「キリンって知ってるか？知ってるよな?!」

あれが爆発する前の平和な世界を想像してみてくれ。
何の憂いもなく、大きくて、黄色くて、直線的な首がトレードマー
ク。

すんごくスタイリッシュ！ボディのフォルムも完璧！

「そんな動物は俺達しかいないだろっつ！」

大自然を表現するにはピッタリ！有名なもんだった。

夕焼け空の地平線をバツクに、芸術的なシルエットを浮かびあがら
せる俺。

広大なサバンナの自然を雄大に駆け抜ける俺。

仲間達とこのビューティフルな首を重ね合わせながら戯れる俺。

ちよっとお茶目な黒のはんてんが体中にあって

「好きな動物は何ですか？」

なんて子供たちが質問されると、必ず「キリンさん」で答えられる。

90年代後半から、テレビにもよく取り上げられた。

どこかのCMでも

「ゾウさんが好きです、でもキリンさんのほうがもっと好きです！」

って小さな女の子が言っただらう。

全宇宙が愛し、また愛されるべき生き物だった。

高いところの葉っぱを好物として、ギョロツとした目が実に可愛い
かった。

それが今となってはとうだ？！

へんてこな丸い胴体。

重々しくて、冷たい手。

足ではなく、手を持ったのもこれが初めてだ。

カッチカチの縦長の切れ目からブリキでできた筒が伸びている。
トレードマークの首はそれに押し込められ、自由に顔も洗えやしな
い。

しかも首を動かせるのは縦方向のみ。

ぐるぐる回せるのはいいものの、しっぽを舐めることもできやしな
い。

このお茶目なアーマーで、時折舞う砂ぼこりを防御しながら、今日
も一日叫びます！

「もうたくさんだ！！」

世間にブチ切れそうになりながら、薄暗く厚い雲の下。

”ヤツ”が噴出す悪魔の塵で、空や大地が汚されないことを神に祈
り続けています。

おいてけぼり（前書き）

首の長いキリンさん。どうしてへんてこな姿になってしまったの？
キリンはあの時の出来事を話します。大きな揺れ。裂けた地面。
はたしてキリンに未来はあるのか？！

おいてけぼり

首の長いキリンさんが、どうしてこんな姿になってしまったのか？
あらためてお話します。

西暦でいう2011年。この年は本当に寒かった。

春先といってもおかしくない季節。

その時はまだ雪が降り続き、サバナン育ちの俺たちを苦しめた。

そう、そして3月の11日。忘れもしない。両親の結婚記念日。

大きな大きな地鳴りがおきた。

俺たち動物もゆっさ、ゆっさと大地に揺るがされ、右へ左へ、上へ、
下へ。

ぐらぐら、ガタガタ、ズズズズズ。

箱も、檻も、お客さんも、みんな、みんな、ぐるり、ぐるり。

上下左右に振り回された。

そのうち地面が大きく裂けて、お隣の檻が一段下がった。

ラザニアのように重なった地面は、断面がむき出しになり、地中に
埋まっていた配管がまるで恐ろしい牙のよう。

そこから勢いよく水が噴き出した。ローマの噴水も顔負けだ。

お隣のサイはちょうど水浴び中。

何も分かっていないのか、親子で仲良く洗いつこしている。

その時、さらに大きな揺れが彼らを襲い、水溜りで子サイが足を滑
らせた。

お父さんサイ、お母さんサイは助けようと懸命に頑張ったが、何せ
すごい揺れ。

自分たちが踏ん張っているのが精いっぱい。そこに裂けた地面が襲
いかかる。

もう、どうすることもできなかった。飼育員さんたちは一目散に逃
げ出した。

「俺たちはどうなる?!」

「俺たちは檻の中でどうすることもできないじゃないか?!」

そんな叫び声だけが人間たちの後をむなしく追いかけていった。

やはり俺たちは下級の愛玩動物。

命を懸けてまで守るべき存在ではないのだ。

あの優しかった飼育員のおねえさんも。

毎日通って俺達の絵を描いてくれた、気のよさそうなおじさんも。

みんないなくなった。

みんな、みんな。

そくだ!ゴリラたちはどうだ?!あいつらは俺たちの中でも人間に一番よく似ている。

仕草だつてそくだ。本当によく似ている。2本足で立って、手を使う。道具も使う。

その巧みな技と、脳を使って、うまく逃げ出すんじゃないか?!長い首を振りかざして、あいつらの檻を見た。

「おおおお!やっぱりすごい!」

「よじ登っている!」

深く掘られたコンクリート製の穴。いつもはよじ登ることもできない。

その壁をうまく登ってるじゃないか!

崩れかけた壁の割れ目に手足を起用に引っ掛けながら、上へ上へと次から次へ。

なんといつても手が自由だ!足が4本の私たちとは大違い!

くそっ!!あいつらはやはり違うんだ!

この星一番の生命の長。霊長類なのだ!!

「おい!ゴリラ!いや!ゴリラさん!ちがう!ゴリラ様!ゴリラ親

分！ゴリラ閣下！！ゴリラ殿下！」

「俺たちも連れて行ってくれ！いや、つれて行ってください！」

「お願いっ！お願いしまーす！ちがつ！」

「お願い申し上げたてまつりまするうううう！！！！！」

「ぼんっ！！！」

「んっ??????」

俺たちがそろって顔をあげた瞬間、コンクリートでできた壁が崩壊した。完全に……。

ゴリラたちが落ちていく。下に、下に。

俺たちよりも数倍知能があるであろうゴリラ殿下様たちが、バラバラ、バラバラ、ズドォーン、ズドォーン。

地面に叩きつけられて動かなくなる。

その姿はまるでゴミのようだ。黒いてんが地面に向かって降っていく。

殺虫剤のひとつりで、お菓子の城に群がっていたアリ達が無残にもバラバラと剥ぎ取られていく。
そんな様子だ。

「ハア〜。」

ため息だけが動物園にこだまする。

「やはり俺たちは完全に見放されたようだ。」

完全にそう気付くまでに、たいそうな時間はかからなかった。

TSUNAMI (前書き)

水が川をさかのぼってくる。

これが世界の共通語となった” TSUNAMI ”

襲いかかる濁流。そして東の果てに恐ろしい化け物の気配が……。

T S U N A M I

私たちのすみかは、河川沿いに作られていた。

大きな広い川の流れをいつもみんなで眺めていたものだ。

その川もあの時は違っていた。いつもと反対。ま逆。上へ、上へ、川が昇ってくる。

「なんてこった！水は上から下へさがるものじゃないのか!？」

「人間たちはそう言っていただろ?!」

「物理の法則ってそうじゃないのか!？」

俺は、知ったかぶりな先生が説教じみた講義をしているあるテレビ番組を頭の中にリロードしていた。

高校講座「物理」だったかな？卵が3個並んだマークのあの局の。それはさておき、ふと気付くと、すでに川沿いの町は水に飲み込まれていた。

動物園のあたり一帯は濁流の渦。

建物は水に飲み込まれ、ばらばらになぎ倒された森の木々があつち、こつちと暴れまわる。

船が丘の上まで運ばれて、自動車はまるでボートのよう。

波に乗り、ひっくり返って上も下もない。

どんだんどんどん山のほうへ押し流されていく。

勢いを増した水は檻のすぐそばまで迫ってきた。

「ギョエエ〜！溺れ死ぬ〜!!!」

さすがにびっくりして、前足を大きくバタつかせながら押し寄せる大きな水の壁に備えた。

あと残り10cm!!!1cm!!!

「もう駄目か!！」

飲み込まれる覚悟を決めて、大きく息を吸い込んだ。

すると、何が起きたのか？濁流は俺たちの目の前でピタリと止まり、後ろに引き始めた。

そして、ゆっくりと遠くの方に帰っていく。

「っ、津波か・・・!？」

俺は思い出した。日本のトランシェイショナル。” TSUNAMI”。

もはや世界の共通語となった” TSUNAMI”

彼は前回遠くの島を襲った。

地球の真ん中。海峡に挟まれてジメジメと雨の多いあの島を。

そして10万以上の人間が死んだ。

津波は慈悲なく押し寄せ、何もかもを連れ去り、飲み込み、いなくなる。

何度も、何度も押し寄せて、大地のすべてを破壊していく。

俺は初めて味わう” TSUNAMI”の恐怖と強大なパワーに圧倒され、

今まで経験したことのない恐ろしさを感じながら、ブルブルと下半身を震わせていた。

と、その時だ。

耳をつんざくような「ボーン」という爆音が聞こえ、澄んだ空に巨大なキノコが現れた。

「キノコ雲。」

大きな大きな、天まで伸びる灰色のお化けだ。

てっぺんにまん丸の庇帽をかぶっている。胴体はモクモク。長細い

シメジのよう。

でも、その細い胴体からは想像もできない程の強力な爆発音が鳴り響いた。

ピカツツと光った光線の凄まじさも、この世のものとは思えない。それだけでも、何も知らない田舎キリンを降伏させるのに十分だった。

お化けは天から俺たちを包み、邪悪をあたり一面に振りまきながら、見下すように立ちはだかる。

「何かふってくるのか?!」

「何かをまき散らすつもりなのか?!」

俺はウロウロとあわてながら、今から起こる最悪の事態に備えた。

「やつの場所は?」

「どっちだ?!」

「山は後ろにある。」

「あれは東?!」

「東の果ての方!」

「海!!!」

「そうだ海、海の方角だゾツ!」

俺がまだ、見たことも行つたこともない海。

いつかこの首を大きく上に突き出して、ジャボンと肩まで身をゆだねながら、海水浴をするのが夢だった。

あこがれの紺碧。おだやかで、潮風が心地よいサンシャイン。

そう、あの、海。海の方に違いなかった。

その時、俺は思い出した。

何年前か前、人間たちが赤い鉢巻をまいて、集まって、げんこつを天に突き出していた。

ある者は大きな旗をもって、ある者は大声を張り上げ。長い長い列を作って、海の方向にイカツテいた。

「怖いものがあるんだな。」

「本当に恐ろしいものがあるんだな。」

俺は何も知らない場末のキリンだが、何かとてつもない化け物が海辺に居ることだけは知っていた。

「やつに何かがあった。ついにやつが動き始めた。」

脳の内側でシナプスに電流が流れ、俺の長い首と大きな体をガクガクと震えあがらせた。

アーマー装着（前書き）

ボロボロになった動物園で、キリンは御用学者と出会う。有無を言わずアーマーを装着するはめになったキリン。仲間も死んだ。みんな死んだ。でも2匹は生きている。一体何がどうなっているのか？！学者たちは何も告げずに排気ガスの匂いだけを残して、とっと立ち去って行った。

アーマー装着

ポロポロになった動物園に俺たちは取り残された。

俺、キリン1と仲間のキリン2の2匹。

やがて緑色のトラックに乗った人間達がやってきた。

全員がまだらな緑色のシャカシャカな服を着て、顔をマスクで覆っている。

大きな爆発が起こった後から、変わった風体のお客さんが多くなった。

執拗に俺たちの写真を撮ったり、なんだか変な光線をあてたり、毛を抜き取ったりもする。

キリン相手のストーカーとは、これまた気持ちが悪い。

ストーカーなんだから、ずっとまとわりつくのかと思いきや、時間を気にしながらすぐさま帰って行く。

「一体何なんだ。」

「俺と居たいのか？」

「そうでないのか？」

「どつちかにしてくれ！」

「気持ち悪いやつらだなあ！」

まだらの緑が引き揚げていくと、次に真っ白でシャカシャカの人間達がやってきた。

たいそう多くの荷物を持っている。

スイッチがたくさん並んだ四角い箱や、チューブが何本も付いている円筒形のボンベ。

鉄骨で作られたクレーンもある。

どこかの実験室を丸ごとここに持ってきたって感じだ。

「こいつらは一体何だ？」

わけもわからず動揺する俺にキリン2が言った。

「科学者だ。」

キリン2は知っているらしい。この真っ白が何者なのか。

「何故わかるんだ？」

「いや、俺がサバンナから連れてこられた時、こいつらに似た人間達が沢山いた。」

「病原菌が何とか。」

「ウイルスがなんとか。」

「そんなことを言いながら、いろんな道具で俺を調べたから。」

サバンナからは俺は飛行機、キリン2は船で運ばれた。

船でやってきた生き物はすべて検査されたと聞いている。

人間のエゴなのだか、恐怖心なのだか、よくは分からないが、キリン2はそれに出くわしたようだ。

でも、今回の検査は前にあったやつとはちょっと違うらしい。もっと、もっと、危険な香りがすると言う。

装置は大掛かりだし、人間の数も桁はずれに多い。

「自分に自信がないのか？」

「こんなに大勢もいらないだろう?!」

「一体何を調べようというんだ。」

俺は人間という種族に一抹の軽蔑を伴いながら、心の中でつぶやいた。

後から聞いた話だが、こいつらは御用科学者という種類の人間らしい。

御用学者は軋轢を嫌う。

権力に従う。

そして、何よりも自分が一番大事だ。金も大事だ。

だから、徒党を組んで。行動する。

つるしあげられ、干されるのが嫌だから。

情報も、真実も、何もかもが多数の力でねじ曲げられる。

それを早く言ってくれば、こんなアーマーつけさせなかったのに。

御用学者達はさんざん議論するふりをして、俺達をベルトで拘束した。

事実を全く知らなかった俺達は、なんだか地獄から天使に助けられたような気分になって

いそいそと檻の中に入った。

檻に入るとガチャヨンという大きな音がして扉に鍵がかけられた。

出入り口はなくなり、俺たちは完全に閉じ込められてしまった。

すると、右から、左から。

上から、下から。

学者達の手が伸びて、次々に眠くなる注射を俺達に差し込んだ。

意識が朦朧となり、その後のことはよく覚えていない。

気を失ってしまった。

その隙に、この変てこなアーマーを取り付けられたって事だ。

作業時間は10分程度と思われる。

眼にも止まらぬ早業で、まんまるでコロコロ、つるつるでピカピカに俺たちを押し込めたんだ。

押し込めるといえば、ゴールに3回ボールを押し込める事をハットトリックと言う。

「目にもとまらぬ早業でー。なーげる手裏剣ストライク！」ってか。

「なんの歌だ！」

「忍者ハットトリック君。」

以来、身動きがきこちなく、不自由で、不格好なままの現在にいたっている。

なぜ俺達キリンが選ばれたのかは、皆目見当がつかない。

「大きくて、長くて、可愛いかったからか？ちつとも理由にならな
いぞ。」

「いや、待てよ。首が長くて遠くまで見渡せるからか？」

「それなら何でもまんまるでコロコロに入れるんだ?!」

「この説もちよつと違うな。」

ぶつぶつ考えてみたが答えは見つからない。しかし、まあ、兎にも角にも、まだ俺たちは生きています。

今のところ、これでやっていくしかない。生きていだけでも儲けものだ。

あきらめにも似た無力感で気持ちがいっぱいになる。しかも、俺達の辺りに動いている仲間は誰もいない。

他の種族も全部だ。

ライオン。トラ。ダチョウ。カンガルー。

みんな死んじまった。

彼らがどうなったか、何となく想像できる。

落ちて行ったゴリラや、おぼれたサイなど、悲惨な現実を見てきたから。

考えるだけでいたたまれなくなる。

他にも、大きな地割れに飲み込まれたり、重いコンクリートに押しつぶされたり。

悲劇と言えば俺も悲劇に見舞われたのかも知れない。

なぜなら、こんなヘンテコに閉じ込められたのだから。

装着させられたアーマーは、これから起こる俺の未来を照らすのか？
曇らすのか？

はたして良いのか悪いのか？

ラッキーなのか違うのか？！

学者達は何も告げないまま、変てこなキリンと排気ガスの匂いを残し、

皆さつさといなくなってしまった。

キリン2との別れ (1) (前書き)

仲良しのキリン2匹。今までずっと一緒だった。動物園のゲートをくぐり、希望に満ちた冒険が始まったが……。

キリン2との別れ (1)

のっしのっし、というより、がきゅーん、がきゅーん。

以前のようなスタイリッシュさも、軽快さもない。

重々しい金属の手を左右に振りながら、村の大通りを東に進んでいく。

目の前には薄緑色のスクリーン。

端っこでめまぐるしく変化する数値を見ていると目が回りそうになる。

胴体はコロコロ、ピカピカ。

俺が”東”と考えると、このまん丸は「ういーん」と回転、東を向く。

”西”と思うと、これまた「ういーん」と西を向く。

「まったく頭のいい洋服を考えてくれたもんだ。」

俺は感心しながら、相棒のピカピカボディに映る自分の顔をしみじみ眺めていた。

食事もハイ・テクノロジーだ。

もう、以前のようにこの長い首をいっぱい伸ばし、きらきらに光った高枝の葉をついばむこともない。

何故なら、その必要が無くなったから……。

お腹がすかないからだ。

動物園でこれをハメていった学者たちは、

チクつと一瞬俺達の首筋に、管のようなものを付けていった。

あれ以来。お腹はすかない。

おしっこも出ない。よだれも出ない。

なにも出ない。

俺はもぐもぐ、むしゃむしゃする楽しみも奪われた。

生き延びるとは、かくも憂鬱なものなのか?!
ゆっさつゆっさと大地が揺るがされ、動物園はメチャクチャ、ボロボロになった。

「一体俺達どうなるんだ?」

「さあな・・・。」

この先の見当が一向につかなくいまま、ボツボツと歩きながら時間だけが過ぎていく。

ただ、あのまま動物園に居てはいけないと直感的に感じた。

「外に出てみるか?」

俺が誘うとキリン2は「えっ!」と少し驚いた様子でビビリ始めた。こいつはいつもビビル。

でも、何にでも優しくなれる彼の性格はその心の弱さの裏返しだ。

「何かいい事あるって。」

「ここに居たって何も変わらないだろっ!」

俺は念を押して、ちよつと派手目で壊れかけた入場ゲートをスタスタとくぐり抜けた。

ここはもう外の世界。

動物園の外。生まれて初めて人間達の生活領域に足を踏み入れた。

「自由?!」

「自由になったのか?!俺達?!」

さっきまでふさぎ込んでいたキリン2も思わず笑みを漏らした。少しばかりの開放感に包まれた2匹のキリンは、顔を見合わせはし

やぎだす。

「こ、これが文明!」

「これが人間達が築き上げた文化社会!」

「やつほおー!!!!!!」

「ワンダホおー!!!!!!」

「.....」

「えっ?????????」

しかし周りをよく観察すると、そこは俺達がイメージしていた豊かな風景とはおよそかけ離れた場所だった。

瓦礫と残骸の街。絶望と悲しみが漂う場所だった。

2匹は一瞬にして苦虫を噛み潰したような顔になった。

そして、大きな体の真ん中にある小さな心が「ギョウツ。」と押し潰されていった。

「おい。どっちに行く?」

もうどうしようもないと思ったのか、それとも気を取り直したのか、キリン2が俺に尋ねる。

「海、海に行こう!」

俺は以前から伝え聞いていたでっかい水溜りに希望を寄せ、夢見ごちで、そう答えた。

そう、その水溜りの事を海と言う。憧れの海。みた事も触れたこともない未知の世界。

サバンナでも動物園でも感じた事のない深く澄んだ紺碧と潮風が心地よいサンシャインの楽園。

俺の想像は広がって、考えるだけで口元が緩んだ。

そして、アーマー装着以来、はじめてよだれが出た。

「でも、海には化け物がある。」

「でかい化け物が怒っているんじゃないのか?!」

「何かをまき散らして!怒ってるんじゃないのか?!」

「ほら!頭から湯気を出して!絶対に怒ってるって!」

「絶対!!絶対そうだ!!」

キリン2はうろたえながら俺に訴えた。

しかし、俺のシナプスは情報伝達構造として機能する事はなかった。

「情報は麻薬と同じ。」

海を想像した瞬間、俺の脳内では、まるで酔っ払いのようにドーパミンが過剰に分泌された。

よだれを垂れ流し、緩んだ顔のまま、ガチャコーン、ガチャコーン、のっしのっし。

東へ、東へと歩みを進めて行った。

キリン2との別れ (2) (前書き)

動物園を出て海に向かう2匹のキリン。片方はヨダレを垂らして大喜びだが、相棒はしかめっ面。海には化け物があるんだってさっ。死の灰を撒き散らす怪物がいるんだってさっ。

キリン2との別れ (2)

動物園の近所を離れ、俺達は随分遠くまで来た。頭の中には澄み切った空。砂浜でのバカンス！

南国の楽園で頭の中はいつぱいになっている。うっとり何だか良い気分だ。

と、その時！

「ピーコンッ！ピーコンッ！」

ヘルメットの中に突然アラーム音が響き、目の前のスクリーンが拡大表示になった。

どうやら俺の心を自動的に読み取るらしい。

大量の水を感知したようだ。

「海か?!」

「憧れの海!!」

いよいよ心地よい想像の世界が脳を埋め尽くしていく。

が、それは海じゃ無かった。いや、間違っても海とは呼べない。だって小さすぎるもん。

湖だった。緑色のスクリーンにはデータがどんどん表示される。

水質・・・。

水温・・・。

などなど。

この国には海のような水溜りがいくつもあるらしい。

「ふう〜。」

俺はよだれと一緒にため息を漏らしたが、キリン2は違っている。

「やった！海だぞ！海！！」

「お前の望みは叶ったんだ！」

「よっ、ラッキーボーイ！！！！」

キリン2はアーマーで覆われた肩で俺をこつきながら、よろこび勇んで叫んだ。

彼は気の優しいイイやつだが読解力、理解力という点において、やや能力が低い。

そもそも、こいつは海に行くのが嫌だったから、ここらで俺を止めたかったのかも。

海らしいところに着けば旅が終わるかもしれない。

安全なところに逃げ出せるかもしれない。

なんて考えてたようだ。

「俺は騙されないぞ。」

振り返って、彼の瞳に合図を送った。

「やっぱり駄目だったか……。」

キリン2は残念そうに首をうなだれた。

湖畔に沿ったワインディングロードを歩いていると、大きな道路に
でた。

そこをドンドン進んで行き、緑色の看板が目立つ大きな高架の下を
くぐったあたりで、俺たちは街に出た。

街といつてもボロボロ、ぐちゃぐちゃ。

動物園のあった村よりずっとひどい。

鉄道の駅があるようだが、とても駅には見えない。

線路は大蛇のように、うねって、ひん曲がり、カモノハシみたいな顔をした電車がホームで逆立ちしている。

幾重にも幾重にも重なりながら、まるでとぐるを巻いた巨大な白蛇だ。

駅へ続く3本の大通りは寸断されてしまったようだ。大きな割れ目が地面に出来ている。

すぐに迂回路が検索され、スクリーンに地図が表示された。

街の北側に川が流れている事がわかった。

「これを下れば海に出られるぞ！」

俺が嬉しそうに言うと、キリン2はしかめっ面で

「化け物ファン。」

と言った。

その後もぶつぶつ愚痴をこぼしていたが、どうやら観念したのか、しぶしぶ後をついて来る。

相変わらず行き先について意見は合わないのだが……。

俺は手前の川沿いを歩いて進もうと言うが、相棒は川向うの道を進みたいと言う。

間を取って仕方なく、俺たちは川の中を進むことにした。

川面に足を踏み入れたその時。

「イテッ！！」

アーマーが変形し始めた。

「うい〜ん。うい〜ん。」

「かちゃん。かちゃん。」

4本の足が自動的に折りたたまれ、腹の部分からひれが突き出された。

「うわぁっ、うわぁっ、うわぁっっっ!!」

キリン2は取り乱し、変形するアーマーにひどく驚いた様子で叫び声をあげた。

「まったくこの服ときたら・・・。」

俺はこの状況に呆れ気味で、ガクガクする首を上下左右に振りながらアーマーのなすがままに体をゆだねていた。

「ぞぶ〜ん。ぞぶ〜ん。どんぶら〜ん。」

俺たちは遊園地の白鳥ボートに乗っているかのように川面に浮かぶ力浮きながら、

仲良く並んで下流に流されていった。

キリン2との別れ (2) (後書き)

川を流されドンブラコ。ドンブラコッコ。ドンブラコ。流されながら天を眺める。すると大空に沢山の怪鳥が飛来する。

キリン2との別れ (3) (前書き)

ギリシャ神話のヘラクレス。まだら緑の武装集団。いろんなやつら
がキリンを危機に陥れる。そして、いよいよ親友との別れが訪れた。

キリン2との別れ (3)

ひとしきり流されると、川は右に大きく曲がり始めた。
迂回作戦大成功！

「これで元あったコースに戻れるな。」

「左に進んで、右に曲がったんだ。間違いない。」

俺がそう主張すると、すっかり化け物におじけづいているキリン2は

「でも、本当にそうか？」

と、スッキリ晴れない顔をして、疑いの目で俺を見る。

そこでもう一度、俺はあたりの様子を確認する事にした。

スクリーンに映し出された航空写真を慎重に分析する。

やっぱり海が近くなっている。

マップに表示された俺達2匹の信号はさっきより確実に東の位置にあった。

「ほらっ、やっぱりだ！」

「お前にもデータを転送してやるからよく見てみる！」

その時、空から「ブーン」という大きな爆音が鳴り響き、

勝ち誇ってヤツに言った大事なコメントをかき消した。

俺が正しい時には、いつも何かに妨害される。まったくツイテない。

空から降り注ぐ爆音はあまりにも大きく、俺たちは思わずのけぞって天を見上げた。

デッカい鳥の集団が何羽も何羽も列をなして近づいて来る。

「ブーンなんて、面白い鳴き声の鳥だなあ。」

キリン2は間抜けにも呟いた。

「そんな訳、絶対無い！」

俺は望遠機能を使って、再度しっかりと飛行物体を確認した。ぼやけていた輪郭が徐々にシャープになりスクリーンに鮮明な映像が映し出された。

「正体が分かったぞ！」

姿が明らかになった飛行物体は、何と人間の乗り物。飛行機だ。デッカいデッカい飛行機の群れ。

一つ一つの機体には青いリボンのようなマーク。そして“USA IRFORCE”と文字が表示されている。

C-130 ハーキュリーズ (Lockheed C-130 Hercules)・・・輸送機。米国。

ハーキュリーズ・・・ギリシア神話の英雄、ヘラクレス。

全長・・・29.79m

全幅・・・40.41m

情報がスクリーンに流れ出た。

「米軍輸送機！」

「近くに空港でもがあるのか？」

救援物資でも運んできたのか、C130の群れは腹一杯で重々しく

飛んでいる様に見える。

高度を下げながら着陸態勢に入っているようだ。
なにせこれだけの災害だ。当然軍隊が動く。

彼らは同盟国として大規模な部隊を派遣して来たのだろう。

「でも、なぜ今、アメリカ軍なんだ？」

「この国には軍隊は無いのか？」

「最初に来るのは自国の軍隊だろう？」

「よくわからない国だなあ?!」

そう言えば軍隊らしいやつらを見たのは動物園にいた時だけだった。
俺がストーカーと呼んでいた”まだら緑”。

それ以来、村でも、森でも、山でも、川でも、軍隊のようなものを見かけた事はなかった。

考えると考えるだけ疑問が沸き起こる。

でも、他国の軍隊が領空内を堂々と飛びまわるといいうドロドロしい光景を目の当たりにし、

何だか急に覚えもない恐怖を感じた。

俺達はいつでも逃げられるように身動きの取りにくい川の中から陸に上がり、

もう一度、東へ向かう広い幹線道路に戻った。

その時だ。「バン！」と一発の銃声があった。

なぜ銃声とわかるかって?!目の前のスクリーンには鉄砲のマークが表示されている。

”Warning”と真っ赤な文字も点滅している。

「うわわわわあゝ!!!」

俺とキリン2はビビりまくっておしっこをちびりそうになったが、

あいにく、よだれもおしっこも出ない。

ちよつと助かった気分だ。

スクリーンが拡大され、前方の詳しい様子が確認できた。

道路が封鎖されている！黄色と黒で彩られたしましまの柵。

その後ろにはしゃがんでいる人間と立っている人間が2列に並んで銃口をこちらに向けている。

まだら緑の全身つなぎとデッカい筒のついたマスク。たれたパンダのような目。

明らかに”やつ”から身を守る準備をした人間達だ。

「何処の軍隊だ！」

「まさか米軍！？それともこの国の?!」

「何でこんな時だけ出てくるんだ。」

「どうせ助けるならもつと早く来てほしかった！」

「しかも俺たちに銃を向けるってどういう魂胆だ。」

俺は本音と愚痴が混じりあって支離滅裂に叫んでいた。

しかし、叫びは届かず、すぐに危機的状況に陥った。

「や、やばいつ!!」

「バババババツツツツツ!!」

耳を塞がずにいられないほどの銃声が響き、頭の上を銃弾が覆う。

俺たちは脚をかがめて姿勢を低くし、道路に転がっている崩れたコンクリートに身を隠した。

これで何とか相手の視界から逃れたが、銃撃は止む事もなく、さらに激しさを増した。

「撃ちまくってきたぞ！」

「それに撃つていいのか?!警告も何もないぞ!!」

チュンツ、チュンツ、と鋭い音をたてながら複数の弾丸がアーマーをかすめる。

相当動揺した様子のキリン2は慌てふためき俺に叫んだ。

「だいたい俺達が何の罪もないキリンだって事、わかってんのか？！」

わからないだろう。だって今の俺たちは誰が見ても相当に奇妙だ。

地球外生命体の大気圏突入用カプセルか、どうひいき目に見ても外国部隊の新兵器ってところだ。

「反撃しなきゃ！何か使える物は？」

スクリーンには赤い鉄砲のマークが表示された。

「コレか！」

あわてて胸の下の方にあるボタンを押すと、つるつるの背中が左右両側に開き、大そう立派な武器が現れた。
機関銃？いや、ビーム砲にも見える。

「これで勝てる！」

俺たちは大きく頷き合った。

「よしっ行くぞ！！」

すばやく飛び出し2匹は攻撃態勢に入った。並んで同時に前かがみなり、敵をにらむと大きく背中を突き出した。

銃口は自動照準で敵を捕らえる。

「発射あ!!」

「プシュ〜ツ」

「えっ?」

弾が出ない。もう一度、

「発射!!」 「プシュ〜ツ」 「あれっ?あれれ?何かおかしいぞ?」

「何で、“バババババババツン”じゃないんだ??」

お互いの頭から水滴がしたたっている。

何が起きたのか確かめようと、キリン2の背中を見ると、機関銃から勢いよく水柱が噴き出している。

「ひよっとしてこれって……」

そう、放水設備。勢いよく水が噴き出す消防設備だった。

「ありやりやりやりや!」

2匹はあわててコンクリートの残骸に引き返し、息を潜めた。

形勢逆転。まだら緑の人間達からは激しい銃弾の嵐。

しかし、ここまで攻撃してくるなんて、よっぽどこを通したくないようだ。

何かを隠したがっている?!隠ぺいか?!人間達はいつも勝手だ。

こんなヘンテコを着せていったかと思うと今度は銃撃。あいた口がふさがらない。

「あれとこれは違う種族。なのか?!」

「それならそれで、もうちょっと横のつながりを持ってくれよ!」
やりきれない思いで2匹のキリンは草むらに隠れた。

「だから海は嫌だったんだ。」

キリン2がボソツと嫌味を言った。

あいつのふてくされた顔とキレのない嫌味を俺は生涯忘れることは無いだろう。

嫌みの事は置いとくとして、俺たちキリンが、身を隠すには、草むらは低すぎた。

目立って目立って仕方がない。色も黄色だしな。草の緑に良く映える。どうにかしなくちゃ。

そうこう考えているうちに、やつらはジープに乗りこんで、どんどんこちらに近づいてきた。
結構な数だ。

「やばいぞっ!もうだめかっ!」

その瞬間。

「ドドドドドドドドオ〜。」と唸りを上げながら、地面が真っ二つれた。

「余震か?いや大きいぞ、新たな地震だ!」

国道の盛り土がまるで柔らかな深雪のように、雪崩を起こし崩れていった。

道路のアスファルトはバキバキと折れ曲がり、左右両側へこぼれ落

ちる。

「おいつ！大丈夫か?!」

俺は相棒に向かって思いつきり手を伸ばした。

しかし、あいつのウルウルの瞳がだんだん小さく遠のいていく。そして非常にも、神は俺たちを別々の谷底へと導いていった。

キリン2との別れ (4) (前書き)

仲間と別々の谷に落ちてしまったキリン。一人ぼっちになって心細さを知る。あたりを包み込むオドロオドロしい空気に押しつぶされそうになるキリン。「でも絶対に諦めない！信じれば夢は必ず叶うから！」そう心の中で呟きながら海へと向かって進んでいく。

麒麟2との別れ (4)

麒麟2と分かれて俺は一人ぼっちになった。
でも、相変わらず海に向かっている。

あの時ババババアーンと乱射された弾を無我夢中でよけた。
その後、深い谷へと転がり落ちた時、もう駄目だと思った。
しかし、まだなんとか息をしている。

「助かったのか・・・?!」

「あいつはどうなった?」

「確か俺とは反対側に落ちていったような・・・。」

スクリーンから麒麟2の信号が無くなっている。

随分と深い谷に落ちたのだろう。

緑色の地図上には、俺の位置を示す点滅がピコンピコンと光っているだけだった。

「一人ぼっちになっちまったか?」

何だかすごく心細くなって、俺はため息まじりに漏らした。

しかし、あきらめはしない。くじけちゃ駄目なんだ。

初めて感じた外の世界。海へ行くと決めただ。

だったらやってやるんじゃないか。

「絶対に諦めないぞ!」

「信じれば夢は必ず叶う!」

俺は自分にはつばをかけて、海に向かって進む事にした。
そこには必ず夢があるはずだ。俺を導いてくれる何かが!

けもの道と言つのもおこがましい草むらの分け目。

道なき道を東へ東へと進んで行く。

深い深い森の奥は静けさに包まれ、不気味が充満している。

キリンの細い華奢な脚では到底無理と思われた山道も、この頑丈なアーマーのおかげで何とか突破出来そうだ。

お生い茂る針葉樹の枝がちくちくとアーマーを傷つける。

湿り気のある泥んこの脚元は。ぴちゃぴちゃと跳ね、ボディのキラキラをどんどん曇らせていった。

しかも、歩みを進めるほどに心細さが増大する。

「あいつどうしてるかなあ？」

寂しさが募ってキリン2を思い出す。しかし出てくるのはどれもこれも変顔ばかりだ。

大きく膨らました鼻に舌を突っ込んでいるあいつ。

白目をむいて、首だけを後ろにまわし

「ポルターガイスト現象。」

とくだらないネタをするあいつ。

ほんつとう、くだらないキリンだった。

今となってはあのしまりの無い顔も、ウジウジした性格もやけに懐かしく思えてくるのだが。

「でも駄目なんだ！」「前に進まなきゃ！」

ブルンブルンと頭を振って、あいつとの思い出を頭から振り払った。気持ち切り替え小道を進む。

しかし相変わらず静まり返った森の中は、物音一つしない静寂に包まれている。

あまりにも何も聞こえてこないの、俺は外部集音器の感度を上げてみた。

すると「サラサラ」と遠くで水の流れるような音を感知した。」

「川があるのか？でも、ちょっと音が小さいな。」

「前のように、どんぶらこ。どんぶらこ。とは、いきそつにないな。」

そのまま直進すると、小さな谷間に小川のせせらぎを見つけた。

「水だ！流れている！」

「じゃあ、下流に海があるはずだ！」

少し光が見えてきた。少しの希望に後押しされて俺は流れに沿って河原を進む事にした。

ゴロゴロとした大小の石が想像以上に4本の足を苦しめる。

およそ今まで体験した道路とはかけ離れ、歩きにくいっいたらありやしない。

ガタガタ、ゴツゴツ足をすくわれる。

「でも、この先に海があるから……。」

そう思う事で、何とかモティベーションをキープすることができた。ずしりと重い首を上下に揺らし、酔っ払いのようにつらつらと歩いていると

小川の水面でキラキラと何か光っている。

ダイヤモンドかはたまた金か？！金色の波がさざ波を作り出している。

「おおっつー！黄金のせせらぎー！」

「これで俺様も億万長者だ！」

俺はお宝を見つけた悪徳商人になった気分になって、キラキラの金色に向かって走り出した。

「ガーーーーーン！」

「勘弁してください。」

あまりにも想像とかけ離れた光景が眼下に広がる。

俺は黄金の国ジパングからスラム街の一角に一瞬で放り出されてしまった。

黄金とは腹を上にした川魚の群れ。当然、全魚死んでいる。死体の山だ。

プカプカ、プカプカ漂っている死んだ魚の白い腹を、珍しく差し込んだお日様が自らの光に反射させていた。

キラキラ輝く金色をかき分けるように何かの流れてくる。

「な、なんだ?!羽が生えてんぞ。」

てかてかの羽毛をプラチナ色に染めながら、野鳥の死骸が流れてきた。

いろんな物が流れついた先で、鹿やイノシシ達が頭を水中に突っ込んで息絶えている。

おそらく水飲み場だったのだろう。

乾ききった喉を癒す為にここに集まってきたに違いない。毒でも流れているのか?!死が満ち満ちた邪悪な光景だ。

昆虫や鳥、微生物にいたるまで、この森には一つの生命反応も無かった。

ライフルを持った迷彩服はこれを見せたくなかったのか。

封鎖地点から東側に、もう生き物は居ないのかもしれない。

犬もいない。猫もいない。ネズミもいない。もちろんキリンもない。

もちろん人間も。

ほんとに何もいない……。

俺は悲しみに打ちひしがれながら、黄金の泉を後にした。

よいしょ、よいしょと谷間を後にし、少し小高い丘を登って行った。するとまた道路に出た。

「また、同じところ？」

キリンにしてみれば舗装された道路はどれも一緒に見える。

しかも、山道の景色に差など見つけれられない。

再び舗装された道路に戻り、振り出しに戻ったような無気力感に襲われた。

しかし、帰ることも投げ出すこともできず、俺はだらだらと東の方へ進んだ。

「絶対に諦めない！信じれば夢は必ず叶う！」

と、心の中で叫んでいた。

希望のともしびを消さない為にも……。

ち・で・じ・か(前書き)

あたりを取り巻く恐ろしい光景。キリンはいろんな災難を乗り越えながらもユーモアを忘れずに前進する。そしてあわてて逃げていく人間たちのトラックからこぼれ落ちた新しいアイテムをGetする。

ち・で・じ・か

スクリーンには絶えず、方位が表示されている。これなら東西を間違えることもない。

便利といえば便利だが、なんだか自分の意思に関係なく進む方向が決まっているようで、

少し不思議な感覚を覚えた。くねくね曲がった林道を抜けたところで、生命反応を確認した。

向こうから迷彩服じゃない人間たちが乗った自動車がやってくる。すれ違いざまに荷台を見ると、品物が山と積まれていた。

あわてて載せたのか、色々と雑多に混ざり合っている。

ふとん。テレビ。タンス。米だわら。・・・etc.

ほっかむりをした荷台はなんともいい加減に縛り上げられており、荷物がいつ落下してもおかしくない様子だ。

そんな事もお構いなしに、猛スピードで県道を西へ進んでいく。

逃げてきたのか?!それとも火事場泥棒?!なんの火事だ?!山火事か?!

「おい。そっちへ行くとお巡りさんがいるよー。撃たれちゃうよおー。捕まっちゃうよおー。」

と冗談めいたフレーズを心の中でつぶやいた瞬間。ガンツ!頭に何かがぶつかった。

ドスン。ゴロン。ガチャガチャガチャ。荷台から落ちた荷物のようだ。

自動車は何も気付かず、俺とは反対方向に進んでいく。それどころではないらしい。

完全無視だ。

「やっぱり泥棒か?!」

「他人の物をぬすんだのか?!」

人間とはあさましい生き物だ。どんな時でも我欲に駆られる。

「少しは俺たち高貴なキリンをみならえってえの。」

俺は去りゆく自動車の背中にあかんべーをした。

といつても正確にはヘルメットがあつて、あかんべーは出来ないのだが。

そして落つこちた荷物に走り寄つた。結構色々なものが置き去りになっている。

洋服に、スリッパ。ニンジン、大根。ポットや割れたお茶碗。枕に毛布。

俺はそこで箱型の電気製品を見つけた。

「これってテレビじゃないか?!」

飼育員室にあつた古いブラウン管テレビ。

経営が苦しいのか、単にケチなのか、このご時世でも、動物園に大画面薄型テレビは無かつた。

ウィーン、カチャツ。ロボットアームで拾い上げ、眺めてみるとなんだか懐かしい。

白黒だ。へんてこりんな楕円形の針金アンテナが付いている。

さっそく電源コードをアーマーの外部コンセントに差し込んでみた。

「お、映るじゃないか!」

ビヨーンと波打った画面が徐々にはつきりし、アナログチックな雰囲気をかもし出している。

地上を伝わるテレビ電波は、今年の7月、デジタル放送に完全移行！マスコットキャラクターはキリン！！
と思いきや”鹿”。地・デジ・化。

「ち・で・”じか”」

だって。シャレの一種らしい。

地デジに”きりかえ”！

地デジに”キリン変え”！

なんてえのも、粹な風情でいいと思うんだが、
そこまでの感性が機能しなかったようだ。

俺は胸元にあるフックにテレビをかけると、特番で流れているニユ
ー番組を聞き流した。

やつが暴れだしている様子を一生懸命解説している。

「 号機のおつりよくよーきが……。」

「 号機がメルトダウンし……。」

なにがなんだかさっぱり理解できないが、この国は大変らしい。

ともあれ、これで何がおこっているのか？！少しは情報が得られる
ようになった。

しっぽ切り（前書き）

人間にしっぽなんてはえてたか？純粹で素直な疑問。そこから、キリンは生き物すべてに共通する大事な答えを得る。

しっぽ切り

「え、本日、東日本にもたらされました、未曾有の大災害に対しまして、」

「国家非常事態宣言をえ、発令いたします!!」

こっか、ひじょう、じたい、せ・ん・げ・ん!

「えーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

これにはさすがにビックリした。国家??!!日本だよな?!

平和だったこの国は、今、そんなやばい事になっているんだ!!

いくらお馬鹿なキリンでも、やばいと言う事くらいは理解できた。

ちなみに馬鹿は”ウマ”と”シカ”と書く。

キリンの文字が入らなくて良かった。

非常事態なんだから、何でもありってことだよな?!

やっぱ、動物にも適用されるんだよな?!

当然キリンにも・・・?!。

そりゃ国道でうろつろしてたらバンバン撃ちまくられる訳だ。

その結果、仲間と離れ離れになって。このつるつるピカピカも傷だ

らけだ。

で、何で今頃いきなり非常事態になったのか?!

あれ以来、デカイ爆発もおきていないし、水も川をさかのぼって来

ない。

じゃあ、あの時は非常事態じゃなかったのか?!

あの恐怖、失意のどん底だった時はなんだったんだ?!

だって、もう、随分と時間が経っている。

動物園の檻の中で天まで達する化け物を見てから、数日?!

いや、10日以上だ!!

その間はどくなっていたんだ？

「非常」な「事態」では無かったと言うのか？！

この国は本当に大丈夫だったのか？！

動物も！人間も！魚も！野菜も！草や木も！！

どうもおかしいと思ってたんだ。

なんだか空は、ずーとうす曇りだし、生き物は何処にもいないし魚が腹を上にして浮いているし。変な事だらけ。

動物園ではいつもニコニコ笑顔で優しい2本足だった人が人間って以外に信用できないやつらだ。

”やつ”は毒を撒き散らすと聞いたことがある。

空気中に、雨の中に、土壌に、川に、そして俺の愛する海に。

”やつ”からでる小さい小さい灰の粒は俺たちの体をボロボロに傷つける。

一瞬で死ぬものもある。少し長く生きられるものもある。

みなを同じようには傷つけない。

だが、確実に死の訪れを早めるのだ。

水色の高級カーテンの前で演台に力強く手をつきながら声高らかに宣言する彼の姿は、

一見カッコよくテレビに映し出されていたが

キリンの俺には、うそつき選手権の代表選手にしか見えなかった。

昨日の国家非常事態宣言を受けて、なんだか慌ただしくなってきた。

テレビも一日中特別番組だ。

騒がしい報道センターで、小綺麗なスーツを着たイケメンとお姉さんが一日中ニュース原稿を読み上げている。

横から横から、次から次へ、ずーと、読み上げている。

新品の作業着をきた人間たちが演説している。

なんだかそれだけでウソ臭い。

毒を撒き散らされたこの現場とテレビスタジオの小綺麗さ。

ギャップを感じずにはいられない。

電力会社も最近テレビによく出てくる。彼らも毎日奇麗な作業着だ。たぶん”やつ”と重大な取引をしたのだろう。関係があるのは見え見えだ。

彼らの言うことは専門的すぎてキリンの俺にはよく分らない。

でも、何度も何度も耳にする単語は、自然に覚える事ができた。

一つは”げんぱつ”という言葉。

あと”ごうき”。

原発。 号機。 げんぱつ。 igoiki。 こいつらはよく

止まるらしい。

ここの近くのそれも止まった。ずーと向こうのあそこも止まった。とまって、とまって、進んで、進んで、3歩あるいて2歩下がる。まるでワンツーパーンチだ。

チーターか?! いや違う。俺キリン。

少し前の事だが、おこのみ焼のような名前の発電所で大事な部品が落っこちたらしい。

お好み焼きじゃなく、もんじゃ焼きだったかな。

みんなで知恵を出し合って、頑張っても、頑張っても、拾うことができなかった。

たくさん頑張り過ぎたのか、人間のオスが一匹、首をつって死んだ。ワイドショーでは、過激なゲストタレントが、”トカゲのしっぽ切り”と言っていた。

慣用句らしい。人間とトカゲ。哺乳類と爬虫類。

哺乳類・・・多くのものが胎生で、乳で子を育てるのが特徴で・・・

爬虫類・・・爬虫類の「爬」の字は「地を這う」の意味を持ち・・・

何かを考えると、すぐに目の前にデータが表示される。

それを参考に、俺なりの結論を得た。

しっぽのある人間は見たこと無いが、しっぽの無いトカゲはよく見かける。

トカゲは本当によく尻尾を切る種族だ。しかし、種族で分類はできないようだ。

人間も尻尾を切ることがあるらしいから。

蜥蜴のしっぽは切れても生えてくるが、キリンのしっぽは、切れたら生えてこない。

もう2度と生えてはこない。

生き物の命も、もう戻ってはこない。

2度と戻ってはこない。

首をつつたオスの命も、もう2度と戻ってはこない。

絶対に戻ってはこない。

これだけは正解に自信がある。

また嘘？（前書き）

人間って本当にあさましいな。何だかだまされるのに疲れてきちゃった。嘘と本当が見えにくいこの世界で、キリンは斑点だらけの大きな胸を締め付けられる。

また嘘？

「またウソか！！」

この国では一見「うそ」が「正義」のように見える事がある。

「ます。」「こみゆにけーしょん。」

不特定多数の大衆、つまり”マス”に大量の情報を伝達する手段。マスコミュニケーション。

この拾った受像装置から毎日出会う俺の体験とは、まったく違った情報が流される。

俺に装着されているガイガーカウンターは、いつもアラームが鳴りっぱなしなのに

テレビは子供たちを外で遊ばせてもいいと伝えている。

俺が通称サングラスと呼んでいる”放射能可視化レンズ”を透して見れば

あたり一面放射能で真っ赤っかだ。

この辺に住んでいる牛や馬、俺と同種の生き物たちは何も知らずにこの真っ赤っかをもぐもぐ、むしゃむしゃ。

よだれと一緒にほおばっている。

”やつ”には味がないからな。悲劇としか言いようが無い。

「ちゃららっちやらあ〜。」

胸元にぶら下げたテレビから明るい音楽が聞こえてきた。

「もう7時だか。」

「こんばんはニュースをお伝えします。」

イケメン男性の挨拶に続いて、きれいなお姉さんが今日のトピック
スを読み上げる。

まさに絶妙！間合いも完璧だ！

- 「 県は地元産 の放射性物質検査を拒否。」
- 「 原発 号機の汚染水を海に放出。」
- 「 市の漁港では魚の水揚げが開始されました。」
- 「 市教育委員会は学校給食の地産地消を推進。」
- 「 市の牛乳から基準値を上回る放射線を確認。」
- 「 大臣健康には直ちに影響なし。とコメント」

順番も内容もぐちゃぐちゃ。ネガティブ？ポジティブ？どっちなの
？！

” やつ ” がまき散らしたものは大量にある。
” やつ ” に汚染されたものは何も売れない。
当たり前だ。

ビジネスの基本、それは信用。外国人の反応は早かった。
海外メディア向けプレスルームはそうそうに空っぽ。もう誰もい
なくなった。

製造業は大打撃。マーケットは大幅に値を下げた。
なのに、テレビは現場の真実を伝えようとしない。
このまま放置すれば、売る側も買う側もみんなが大変な被害者にな
ってしまう。

「 君たち当事者じゃないの？！俺から見たら同じ種類の動物だけど。」

頭の中に疑問がよぎる。そこからさらに俺は困惑する。

「いっぱい いっぱい エネルギーを使ったのは誰?!」
「いっぱい いっぱい 快適に暮らしてきたのは誰?!」

快適さの裏側には、苦勞や問題を引き受ける人たちが居る。

快適なオフィスにエネルギーを届ける為に、不安でいっぱいだけど、
”やつ”を引き受けなければならなかった人たち。

繁栄と郷愁……。

相反する命題はこの世にいくつもある。

悲惨な現実と部屋の中の小奇麗さ。

ブランド物の高そうなスーツは、理性を守る唯一防衛アイテムか?!
無関心な自分を演じる唯一の舞台衣装なのか?!

俺はまた、ふと、サバンの大地を思い出した。
キリンには服はなかった。はだかっぺ。

およそ文明とはかけ離れていた。
情報を伝達する手段といえば、

「音」つまり泣き声か、

「首」つまり長い首をぶついたり絡ませたりする動作のみ。
そんな俺達にも守るべき約束があった。

”仲間を決して裏切らない。”

”種族を守るために努力する。”

生物として最も当たり前の真実。

生き物として最低限の心。

思いやり……。

もはやこの、黄色い肌をした二本足達には通じないのかと思うと
同じ黄色い動物として、大きな胸がやりきれない思いで一杯になっ
た。

また嘘？（後書き）

嘘だらけの世の中に嫌気が差しながらもキリンは前進し続ける。憧れの海には恐ろしい悪魔が待っているというのに……。第2章”ヤツ”。激しい悲しみと怒りがキリンを待ち受ける！

大蛇と怪物（前書き）

邪悪な”やつ”の気配が感じられるようになったキリンに大きな力が襲いかかる。いよいよ第2章の幕が開けた。

大蛇と怪物

第2章 「ヤツ」

〈 大蛇と怪物 〉

俺の住む国のお隣さんは、なんと地震製造装置。

それをお知らせしておこう。

詳しく言つと、深い深い海底で、大きな亀裂がぶつかり合っている。毎日、毎日、ぶつかり合っている。

全長1000km以上。

深海でうごめく巨大な蛇はずると体をくねらせながら、時折、地上の俺たちを困らせる。

そして、ビビらせる。

まさに大自然の神秘。大いなる地球のいとなみと言つていいだろう。地上の支配者である人間達も、この「いとなみ」だけはどうしようもないようだ。

なんたつて相手は地球。ビツクだ。

今度の一件も俺達にとっては大きな大きな悲しい出来事だったが、ビツクな彼にとっては、ほんの小さなくしゃみ程度でしかない。

そんな現実をつきつけられると、恐怖で背筋が凍るようだ。

” やつ ” から半径20km以内に突入した俺は、ウゴめく大蛇にビビりながらも海と平行に走る国道を進む事になった。

まるで何かに引き寄せられるように。

まっすぐに、まっすぐに……。

「びびびびびびー!!」「じくじくじくじくうううう!!!!!!!!!!」

稲妻が走った！

「ゴロゴロゴロオー！！！」

「誰だ?! そんなに怒ってるの?!」

「大体、稲妻つて空じゃないの?!」

「いや、今のは違う。地面だ!!」

目の前の地面にジグザク模様が描かれた。まさに地上の稲妻。そして、デッカイ口を開けた恐ろしい怪物は、色々なものを飲み込んでいく。

車が落ちる。ばあさんが落ちる。じいさんが落ちる。

今度はガードレールが食べられた。

おいおい、牛も落ちていくよ。

道路のアスファルトも粉々、ばらばら。

緑の木々はふりかけですか? ちょっとピリ辛の薬味ですか?!

土と一緒に食べられた。まるで好み焼きにトッピングされた青のりのようです。

しかし、たいそうな腹ペコ野郎だ。

こんなに食べちゃ、お腹も痛くなるだろうに。

「ドドドドドオ~~~~!!!!」

2回目の地鳴りが起きた後、大きな大きなその口はかるうじて閉じられた。

正体を誰にも明かさぬままに……。

稲妻でも、モダンデザインでもない。

地面の割れ目は綺麗に縫合された傷口のよう。

まっ平らな畑の真中を真っ二つに引き裂いて、静かに閉じられた。

こんもりと盛り上がった無口で純真なその唇は、まるで何事も無かったかのよう

大地の真ん中に無邪気な笑顔を作りだしていた。

回る女（前書き）

”やつ”は明らかに生き物をむしばんでいく。狂った現実。狂った人間。狂った世界。キリンはその事実を目の当たりにする。狂った

回る女

「グルグルぽんちい！」

「グルグルぽんちい！」

気が遠くなるような高い声を発しながら、変な生き物が近づいてくる。

頭は胴の2倍近くあり、両耳に細長い角が生えている。

短いスカートのような下半身。

すらっと伸びた脚はスーパーモデル級で、一瞬魅力的にも見えたが、何せおかしい。

キリンには想像すらできなかった見たこともない生き物だ。

そして甲高い声を上げながら、甘えたようなしぐさでグイグイ迫ってくる。

「たぁーんたぁーんしてみてえ〜。」

「Turn ! Turn ! してみてええ〜。」

接近は間近だ。

前方5m!!!!もう間に合わない!!!

「ゴツッン！」

ぶつかった瞬間、俺は思った。

「やられたんだな。」やつ”にやられたんだ。

至近距離でよく見てみると結構かわいい顔をしている。

大きなお眼目はチャーミングでまるでキリンのよう。

好みのタイプの人間だ。

しかし、ブルーに透けたゴーグル越しには悲しい表情。

つぶらな瞳から涙があふれ出している。

「死を覚悟しているのか?!」

「それでヤケクソになっているのか?」

本当のところはわからない。

でもほほをつたう涙は本物だ。

倒れこみそうになっている彼女を金属製の細い腕で抱きかかえながら、

俺の心はまるで昔の恋人に再会したかのようなゆるい空気に包まれた。

そして胸の中にフツフツと怒りがこみ上げてくるのを感じた。

「あの化け物だ!天まで届くような薄黒い灰のキノコ!」

俺は思わず叫んだ。

” やつ ” から出るラジオアイソトープは半端じゃない。

気付かないうちに忍び寄る。

そして、思うがままに暴れまわり、地球上の生物をみんなおかしくしてしまう。

色もない。においもない。音だつてない。

温かさも、冷たさも。なんの感触もない。

” やつ ” には本当に何もなし。本物のお化けだ。

俺達の肉体。細胞。ミトコンドリア。俺達の大事な大事なDNA。

そして俺達の心まで。生物の全てを傷付ける。

3人死んだ。5人死んだ。10人死んだ。

そしてここにはもう誰もいない。

「やっぱりこの人間もやられたんだ!」

今鏡をのぞいてみたら俺の頬はさぞひきつっている事だろう。
なにせ、何もかもが驚くことばかりだから。

目の前のスクリーンに発光ダイオードで描かれたデジタルでキュー
トな3D映像の彼女は、

まんまるい俺の姿を恨めしそうに眺めながら、俺の腕の中から旅立
って、またもひたすら回り続けた。

ぐるぐる、グルグル。くるくる、クルクル。

そして約30秒後。

長く長く続いているアスファルトの地面の上で彼女は死んだ。

頑固なじいさん (1) (前書き)

放射能だらけの誰もいない町でキリンは老夫婦と出会う。頑固なじいさんの胸の内に人間のやさしさをキリンは垣間見る。

頑固なじいさん (1)

俺は再び東に向かう道に入った。

なんとそこには動く影があった。一軒家に2つの生命反応がある。動きは鈍いようだ。牛か？馬か？

人間か？透過フィルターにスクリーンを切り替える。

3本足！！！！？？？？

そんな動物いたか？！

焦点を合わせると一本の足が異様に細い。

分析された情報が表示される。細い脚は木製だ。スクリーンにくつきりと正体がうつし出された。

どうやら杖をついた人間の年寄りのようだ。

しかし、何故こんなところにいる。

危険が押し迫っているこんな場所に。

ゆっくりと近づいて、窓から中を覗いてみた。

じいさんと、ばあさん。

2人の人間が、締め切った家屋の中で、防護マスクをしながら静かにたたずんでいた。

「わしらはなんともないんじや。」

「いままでこうしてここに暮らしてきた。」

「これからも何ともないんじや。」

2人は顔をつき合わせながらちやぶ台をはさんでうなづいている。とうに避難指示が出されているこの地域で。

「彼らはここに居続ける気なのか？！」

「駄目になっちゃうんじゃないか？！」

俺は、家の中に入り、じいさんとばあさんをここから逃がす事にした。

トントントン。

玄関の戸を叩き2人を呼んでみた。

「ダ・レ・カ・イ・マ・ス・カ・?!」

キリンなりの丁重な呼びかけは、外部スピーカーから人間の言葉らしく発せられた。

しかし、とぎれとぎれ。年寄りたちには聞こえないようだ。

「こんにちは、誰がいるかねえ?!」

今度は、あらかじめメモリーに用意されていたベタなフレーズを再生すると、

ガラスと玄関の引き戸が開いて居間の奥からじいさんが現れた。防護服のマスクから「シュー」と息が排出される。

「誰じゃ?!」

マスクに声がこもる。

「何のようじゃ?!」

もごもご声でさらに続ける。

「わしらは行かん。絶対に行かん。」

じいさんはすでに分かっていたようだ。

はなから反対を言い切った。

まるまる、コロコロの俺をキツとにらみつけ、奥の居間へと戻って行った。

どこか寂しげで、悲しそうな背中をしながら。

この土地が好きなのだろう。この土地を愛しているのだろう。その思いは私たちキリンにも痛いほど伝わってきた。

「じいちゃん。ここはもうだめだ。」

「避難しよう。役場のみんなもそう言ってただろう。」

誰もいない玄関で、奥の部屋に叫びながら、説得工作を続けた。

時間がたてば、じいさんが考えを変え、

自然と事態が好転すると甘く考えていたのかもしれない。

頑固な爺さん (2) (前書き)

爺さんのやさしさとは？！婆さんの気持ちとは？！2人の年寄りに
いったい何があったのか？！爺さんの秘密がいよいよ明らかに！

頑固な爺さん (2)

家の周りに犬の死体がある。

小屋の中ではぎゅぎゅぎゅ詰めになった、鳥の死体。納屋の横では牛が目をひんむいて横たわっている。

そんな光景を眺めながら、3時間ほどが経過しただろうか。その時だ、家の中の生命反応が一つが点滅しだした。

2つあった信号の内ひとつが消滅しかかっているように見える。

じいさんか?!ばあさんか?!どっちだ?!

どちらにしても緊急事態には間違いない。

俺は何とか中にいる人間を助けようと、必死で戸をたたいた。

ドンドンドンッ!

「じいさん!あけてくれ!!家の中で何かあったんだろっ!」

ドンドンドンッ!

「具合が悪くなったんじゃないのか?!」

「誰か倒れたんじゃないのか?!」

「助けたいんだ!お願いだ!ここをあけてくれ!」

しばらくするとガラツと音を立てて戸が開いた。
ばあさんだ。

「ばあちゃん!逃げる気になってくれたのか?!ありがとう!ありがとう!」
「がとつ!」

思わず感謝の気持ちが入み上げた。

俺の目の前に立つ年老いた女は返事こそしなかったが、防護マスクに覆われた首を少しだけうなずかせ、ここを出る意思を示した。

「さあ！出よう！」

俺はウィーンと短い金属の手を差しのべたが、なんだか様子がおかしい。

生命反応はどんどん弱くなって、ついにスクリーンの信号は光らなくなつた。

「何故?!何故だ?!」

「目の前にはあさんはいるのに?!何故?!何故消える!」

俺は一瞬我を忘れて考えたが、起きている事態を理解することはできなかつた。

もう一度しっかりと確かめようと、ばあさんの顔を覗き込んで見た。しかし、生きているのか?死んでいるのか?防護服越しに見える顔はいつこうに区別できなかつた。

あーだこーだとしているうちに、ふらつとばあさんの体が揺れて、俺の目の前で倒れた。

しわくちやの顔に少女のような笑みを浮かべながら。

小屋の奥からじいさんの声がする。上ずって、泣いているようだ。そして爺さんはそろそろと重い口を開いた……。

頑固な爺さん (3) (前書き)

爺さんと婆さん。せつない別れを経験し、キリンは大きく成長した。そして進む。前に向かって。次に待ち受ける厳しい現実を感じながらも、まだ何も知ることなく・・・。

頑固な爺さん (3)

「みんな死んでしまったじゃろ。」

「ばあさんまで。」

「ワシは逃げると言ったのに。何度も何度も言ったのに。」

「ばあさんの防護服には穴があいてしまったんじゃ。」

「慎重に、慎重にここで暮らしてきたのに。」

「少しの暇も共にいて。ばあさんとの暮らしを大事に大事にしてきたのに。」

「この前、ちょっとした事でささくれに服をひっかけてしまって。」

「ほんの少しだけほころびが出来てしまった。」

「大丈夫。このくらい。大したことないさ。心配する事ないさ。」

「ずうつとじいさんと一緒にいるから。」

と言ってガムテープでふさいでいたけれども、

やっぱり心配していたとおりになってしまった。

「あいつは目には見えないが、どんな隙間からも入り込んでくる。」

「死神と一緒に連れてな……。」

じいさんの目は涙で一杯だ。

「もう、駄目なんだ。みんな、みんなやつにやられるんじゃ。」

「この村はもう終わりだ。もう終わりなんじゃ。」

「わかってるんだよ。本当は。わしにだってわかってる。……。」

「……。」

「生まれれた村で、ばあさんと一緒に死なせてくれないか。」

「ここで2人で眠りたいんじゃない……。」

人間とはなんともセンチメンタルだ。

野生の動物は、”生きる”事が最大の目的である。

生きるためにすべての行動が合理的に機能する。食べる。寝る。逃げる。すべて生きるためだ。しかし、目の前にいる人間は死を急ぐという。

全く不可思議だ。

もしここに誰もいなくなり、何もかもが無くなっても、時がたてばまた、別の何かがここにやって来る。

そしてそれらがこの場所で、また生きようと努力する。

増え、進化し。時が流れ、文明が起こる。

危ないことから逃げようとするし、危ないものも作らない。

それが、生態系というもののな。

ひょっとしたら人間とは生物ではないのかも知れない。

もっと違う得体の知れない何か？！

俺たち動物とは全然違う別の物なのか？！

なんたって”やつ”のような化け物を作ってしまうやつらだからな？！

俺は一通り頭を悩ませ、

「長生きしなよ。」

そう言い残し、村を後にした。

無人小屋の少女 (1) (前書き)

じいさんの家を後にしたキリンは誰もいない集落に入る。家の中は真っ暗。人っ子一人いやしない。そんな静寂を破るように異様な積み木の音が聞こえてくる。

無人小屋の少女 (1)

じいさんの事をずっと考えながら、誰もいない農家の集落を進んでいく。

狭い狭い農村のせこ道だ。

でもそこには生き物の反応は微塵も感じられず、

ただ、建物の暗い窓の中からシーンとした静寂が漂うばかりだった。

どこの家の窓も開いたままだが、電気も来ずに中は真っ暗。

シーンと静まり返っている。

「カタツ。カタ、カタ。コトツ。」

あれ変だ。動くものは何もなく、ピンと張りつめた空気だけが漂うこの集落で、

暗く真っ暗な窓の中から小さい小さい音がする。

子供が何かで遊んでいるような音が。

何か生き物が居るのか?!

俺はその小さい暗闇の窓に顔を伸ばして中を覗いた。

「。。。。。」

真っ暗だ。何も見えない。

当たり前だ。

そんな事を考えていると、まゆ毛の上の方が急に重たくなって、なんだか温かくなってきた。

ひゅーいーいーいー。

「あれっ!?!なに?!」

氷のような涼しげな音と一緒に光線が放たれ、中の様子がスクリーンに映し出された。

丸く照らされたサーチライトの中に少女が見える。

「えっ！まじで！」

さすがにキリンである俺もビビった。

「カタツ、コトツ」という音は少女が遊んでいる積み木の音だった。俺は意を決して声を上げた。

「お嬢さん。お茶でもしませんか？」

「ダァー……。違う。そうじゃないだろっ！」

頭脳明晰なアーマーの集積回路もこの現実には困惑気味だ。

「もしもし、おねえちゃん。なにして遊んでいるの?!」

そうそう。その表現でよろしい。自分自身で納得。

真剣な俺の気持ち伝わったのかどうかはわからないが、

少女はその声を聞き振りかえった。

そして積み木をどんどん積んでいた手を止め、

目の前に広げてある無数のピースをコツコツ合わせ鳴らす事もやめ、俺の方に顔を向けた。

「よっしや！今だ！」

俺は知りたがりの感情を爆発させ、彼女に質問した。

「お姉ちゃんは小学生だよね？こんなところで何をしてるの？お父さん、おかあさんは？」

彼女はにっこり笑え返し、

「ここにいるよ！」「っと小さくてかわいらしい両手につかんだ積み木を見せた。

無人小屋の少女 (2) (前書き)

少女は一体どこの誰？どうして一人で？何を積んでいるの？キリンは背負わされた試練の行方を悟り、叫ぶ！

無人小屋の少女（2）

その手には位牌が握られている。

黒くて、大きくて、小さくて可愛らしい少女の手にはとつてい似つかわしくない。

それがお父さんとお母さんなのだろう。

大事に大事にギュツと握られている。

少女の前に山積みされた残りの位牌は誰のものなのだろうか？

まさか他人のもの？！よくもこんなに集めたものだ。

まあ、こんな田舎だ。近所のおじいちゃんおばあちゃん

優しくしてくれた村の人たち。みんなが家族のようなものなのだろう。

沢山の思い出があふれ出しそうだ。

山積みになった黒い塊は、身内も近所も区別せず、

まるで「みんな仲良し」と語りかけてくるように感じられた。

肩を寄せ合って、恐ろしい外敵から身を守っているように

重なり、そして積まれている。

この村で一体何人の人が無くなったのか？！

地震で、津波で、そして“やつ”の毒で。

何も知らされなかった善意の人たちが、何も知らされないまま命を奪われる。

もつとちやんと言ってくれていれば！

もつとちやんと知らせてくれていれば！

何もなくなる前にいろんな事が出来たのに！いろんな命が救えたのに！

俺は何だか今までの自分が急にダメに思えて、一瞬鬱に襲われた。

目の前で少女は笑いかけてくれる。

その姿に力をもらいながら、精一杯気持ちを奮い立たせてみた。

「このままじゃ駄目だ。」
「このままじゃ何も変わらない!」
「もう目覚めなければいけない!」
「自分で考え、自分で決めなくちゃいけないんだ!」
「そして前進し、道をきりひらこう!」

そう思った瞬間、目の前にいた少女は、今までで一番の笑顔を満面に浮かべ
マスクに覆われた俺の目をじっと見つめながら
すうーっとしぼんで、消えてなくなつた。
同時に後ろの位牌の山も、ふわ、ふわっとおのおのに輝きを放つて、
一つ一つ、順番に消滅していった。

「何?何だつて?!」
「今のなんだつたの??」
「デジャヴー???」

俺は突然の出来事にめんをくらつて、大きなお目をぱちくりぱちくり。
長いまつげを上下にゆらし考えた。

「少女は消えた。そして位牌も。」
「幻だつたのか?」
「それともアーマーが壊れたのか?!」

分からない……。
もしこれが幻想ならば、一体、神は俺に何を見せたかつたのか?
何を悟したかつたのか?
村人たちの温かさ?!人々の未来?!命の尊さ?
はたまた、俺の不甲斐なさか?!

いずれにしても俺にとって、何か意味のある出来事だということには間違いない。

俺は燃え上がる心の炎をメラメラとたぎらせ、

「何が来ても負けない！」

と心に固く決意した。

邪悪な悪魔（前書き）

もうもどることはできない。俺は前進するしかないんだ！そして憧れの海へ！”ヤツ”に近づくとつれ周囲の状況は悪化してくる。でも、現実から目をそむけてはいけない。困難を乗り越えれば、必ず未来は開ける！

邪悪な悪魔

ついに”やつ”のおひざ元まで足を踏み入れた。

「何もない……。」

かろうじて残されたアスファルトの上にポツンと立つ俺の両側は、見渡す限り瓦礫のみ。

人っ子一人見当たらない。動物達の姿もない。

こんなに何もないのは初めてだ。

アフリカから連れてこられた時、巨大なビルや動く乗り物、雑音。そして、クサイにおい。

猥雑な物事に悩まされたものだ。

しかし今は何もない。すべてが流され、砕け散り、前の姿を失ってしまっている。

やけに透き通った空気は、まるで何かにだまされているようだ。

「いや、まて、見えないだけか!？」

シーンと静まりかえっているこの空間には”ヤツ”が吐き出した大量の毒が充満しているはずだ。

別に臭くはないが、その悪質さは脂ぎったおっさんの加齢臭よりたちが悪い。

なんたつて生き物を死に追い立てる。

あの悪質な物質が周りに充満しているのだ。

「なんてこつた……。」

「何もないのに、邪悪だけが満タン一杯。給油完了!」

透き通った毒以外には、長く広い道路が地平線までぬうっつと伸びるだけ。

「ほんとに何もなくなつた……。」

俺の故郷のサバンナも田舎で何も無いが、ここよりはもうちょっとましだ。

なぜなら爆発を起こす怪物もいないし、草も木も一杯ある。なにより新鮮な空気と輝く太陽があつた。

ゆっくりとのんびり流れる時間は俺達をまったりと癒してくれた。

「あれはなんだ?! 街?!」

線路と交差している道路を進んでいくと建物が姿を現した。

建物といつても壊れた廃墟と流された瓦礫の山。

周囲の状況を確認しようと望遠レンズで遠くを見てみる。

田んぼの真ん中に学校が見える。高校だろうか?

高台にも学校。小学校と中学校らしい。

以前は子供たちが沢山いるにぎやかな場所だつたんだろう。

授業をサボって本屋にたむろっていると、近所の雷親父に怒鳴られそう。

古き良きのどかな田舎を思わせる風景だ。

「うんっ?! でも、何か変だぞ?!」

いびつな空気があたり一面を包みこんでいる。

目を凝らしてみると周りの景色が何だかおかしい。

俺は風景を構成する一つ一つのパーツがまったくもって異様な事に気が付いた。

ただの防風林に見えていた大きな松の木はさかさま。

根っこが上を向き、枝が地面に突き刺さっている。

おいしそうに見えていた赤い木の実はよく見ると腐った魚の死骸。内臓がこぼれ出てカラスがおいしそうについばんでいる。

ごつごつした黒いじゅうたんは哀れな2本足達の頭だった。

”ヤツ”の邪悪な爆発に巻き込まれたのか、こちらに頭を向けながら将棋倒しに倒れている。

爆風に押され倒れこんだ背中のは焼けただけ、無残に崩れ落ちて
いる……。

この悲惨な光景はおよそ60年前にも存在した。

中心のドーム上空580m。

街を壊滅させたのは”小さい男の子”だった。

彼はきのこのような大きな雲を作り出して、一瞬にして多くの命を奪っていった。

そのかわいい名前からは想像もつかないほど恐ろしい思い出を残して……。

「やっぱ、ぜんぜん安全じゃない……。」

人間達は”ヤツ”が絶対安全だと何度も繰り返した。なのに、それは嘘だった。

やっぱ作り話。神話だった……。

愚かな2本足達は何度も何度と同じ過ちを繰り返す。

”小さい男の子”が産み落とされてからと言うもの、何度も大変な出来事が起こった。

俺達キリンのほうがよくお利口さんだ。

俺はブツブツと愚痴を言いながら、なんとも不気味な光景を横目に、海の方角に進んだ。

「行き止まり?!」

どんつきにデツカい工場跡のような場所が見えた。

それを取り囲むように道路は左右に分かれ伸び、生き物を寄せ付けない意思を高らかに示している。

堅固な要塞には大事なものが守られてい事が容易に理解できた。

「右の奥に何かあるゾ。」

うす曇りの空の下にもくもくと一本の筋が立ち上がっている。

「”ヤツ”か?!”

それは陽炎のようにユラユラと波打ちながら空高く伸びている。

邪悪に満ちた黒い塊。

見るからにヤバそうな姿で、こっちへおいでと手招きしている。

あれほどあこがれていた海。

なのに焼け焦げて死の灰を撒き散らす巨大な悪魔が立ちふさがっている。

「海には簡単に出れそうにも無いな。」

俺はこれから自分に降りかかるであろう惨事を直感的に察していた。

第2章完

邪悪な悪魔（後書き）

いよいよ第3章は前半のクライマックスとなります。麒麟の行動に意味はあったのか？麒麟は”やつ”との戦いから何を学ぶのか？！主人公の麒麟と自分たち市民をダブらせながら、一緒に夜明けの準備をいたしましょう！

お前キリン2じゃないのか？（前書き）

目の前に突如現れたのは離れ離れになったヤツだった。何故会うことができたのか？！感動の出会い。そして2匹を待ち受けるものは？！

お前キリン2じゃないのか？

第3章 「友」

潮の香りがセンサーに検出され、海に近づいた事を知った。
なんてつたつて、俺が頭で考えるとどんどんザクザク情報が目の前に現れる。

塩分 パーセント。

湿度 パーセント。

放射線量 ! !

桁が多すぎる！！

最後の数値だけは知らずに済ませておきたかった。
海岸と並行に走る国道を、ガツチャンガツチャン南に進んでいる。
すると、まるで鏡を見ているような同じふうてい、おなじ大きさの物体に出くわした。

「なんだ?!」

「ひょっとして、キリン?!」

そうだ、そうに違いない。

動物園から出てバンバン撃ちまくられたあの時、国道で別れたキリン2。

ヤツが今、目の前にいる！

俺と同じ、コロコロ、ピカピカ。

アーマーを付けてこちらに向かってくる。

どうやら同じところを目指しているようだ。

しかし、さてよ。相棒は海が嫌いだったゾ??

「海になんて行く気にもならない！」

「俺は海には行かない！」

「あんな化け物の所になんか絶対に行きたくない！！」

つて、ふくれっ面でキレてたよな。

ライフルで威嚇する防護服の人間達。大きな揺れ。国道崩壊……。別々の谷へ落ちて、俺とは反対方向に逃げ出していったはずだ。

「何かの間違いか？！」

俺は少し懐疑的になって、もう一度識別コードを照合し直した。あれ以来、一度もキリン2のコードを捕らえたことは無かった。

「ピピピピピピピピピピ。。。。。」

やはりキリン2のコードと一致。

画面が望遠に変わる。

緑のスクリーンに映し出されたのは間違いなくキリン2だった。

「ハッキリ認識できるゾ！」

「今度こそ間違いない！」

「数少ない俺の友人！サバナナの友、キリン2だ！」

「偶然……。なんて偶然なんだ。。。。。」

「神に感謝します。もう2度とキリン族とは会えないと思っていました！」

踊るような喜びが込み上げた。

なぜならここ数日、動いているものを見たことが無かったから。

無反応な生命感知センサーは、俺をどん底まで心細くさせていた。

「ジジジッ。ジジジッ。ジーッ。」
「こちらキリン2。応答せよ。ジジジッ。」

ノイズに邪魔されながら久々にあいつの声を聞いた。

「おっ、おいつ、お前、生きてたんだな！」

なんだか無償に感激し、声がつまった。

「じーじー。がーがー。邪魔なノイズは”ヤツ”から出た何かの原因
だろう。」

それでも俺たちは感激しあう両耳を研ぎ澄ませながら相手の会話に
耳を済ませた。

「お、お、俺は、ジジ、ジジ、ジジジジ、に、にげ、逃げたが・・・
」

「あ、と、を、お、追われ・・・。」

「で、でも、お前にあ・い、あいたくて・・・。」

俺は感激して、居てもたつてもいられなくて、やつを抱きしめた。
ガチン、ゴチン。キンツ、キンツ、キンツ！
かすれ会つアーマーの音。

近寄ると会話が鮮明になり、俺たちは久々の友情を確認しあつた。

「お前、海は嫌だったんじゃないのか?!絶対に来ないと思っ
てたよ。」

「ああ、俺もそうしたかった。あの怪物に会いたいなんて、誰も思
わないさ。」

「でも、どの方向に進んでも、最後にはこっちに向かっているんだ。」
「何故だかさっぱりわからん。」

「お前に会いたい。」

「そう思ったからここに来てしまったのかも……。」

思いが影響を与えたのか？！

それとも何か仕組まれているのか？！

しばしの沈黙があたりを包んだ。

そういえば、俺もなぜかしらこのルートでここに来た。

もっと安全なコースもあっただろうに。

キリン2も同じように感じていたのか？！

俺たちは動物園でこれを着せられたことから順に頭を巡らせた。

するとやっぱり偶然のようにみえるこの事態に、隠された必然を感じ

ずにはいられなかった。

しかし、悩んでいてもはじまらない。

忘れてはいけない。

俺たち2匹の目前にはメラメラと炎を撒き散らす、“ヤツ”の影が

立ちふさがる。

化け物はもうすぐ近くだ。

友と再び合流し、元気を取り戻した俺は、

またもふつつつとした闘志を燃え上がらせていた。

お前キリン2じゃないのか？（後書き）

何故だか自然と海へ向かっていく2匹はへんてこな婆さんに出会う。
・。婆さんとの運命的な出会いが2匹を心の葛藤へと巻き込んでいく。

アーマーを付けたばあさん (1) (前書き)

海に近づいたところできらりと光る何かを見つけた2匹。なんとそれは人間のばあさんだった。置き去りにするのか？連れていくのか？2匹は葛藤の中から本当の正義について考え、命について悩み、そして成長していく。

アーマーを付けたばあさん (1)

ガチャコーン、ガチャコーン、2匹並んで海を目指す。
うまい具合に栄養が供給されているのか、今のところそんなに疲れは無い。

しかしのろい。これだけが難点だ。
いっそのこと空を飛べるようになっていればいいのに。

「ガチャガチャツッ！」

後ろのほうで音がする。

「おおっ、ひよっとして飛べるのか?!」

俺が頭に何かを描くと何らかのアクションが起こる。
しっぽの下の方からジェット噴射が！
何だかオナラみたいだ！

「ボツッ！」

俺は空に浮きあがった！が、しかし……。

「ボツッ！ボツッ！ボ、ボ、ボボボボ……。」

落ちた。噴射は一発きりだった。

どうやら本格的に飛べるようにはなっていないらしい。

それでも3メートルほど浮き上がっただろうか?!少し面白かった。
空をぐんぐん飛べなかったのは残念無念だったけれども

また何かの時に使えるだろうと割り切って、のっしのっしと進むこ

とにした。

しかし、窮屈だ。本当に窮屈だ。アーマーのタイトさに邪魔されて、思うように足がでない。

歩幅も短い。短すぎる。すらつとした長い脚で、さっそうと歩いていた日々が懐かしい。

「あーあ、帰りたいな。サバナ。昔ながらの平和な動物園。」

思わず愚痴がこぼれた。

あれからどれだけ経ったのだろう。キリンと分かれたり、また、出会ったり。

色々な事があった。

俺はスクリーンにうつし出されている何行もの数字の中から走行距離を見つけて出そうとした。

150kmとか、0.6μとか、10000?とか、300m?とか、

わけのわからない数字が目まぐるしく変化する。

単位も違えば桁も相当違う。

「走行距離はどれだろう?!目が回りそうだ。ま、どうでもいいか。」

蒸し暑く、頭がぼーっとしてきた俺は

数字を一つ一つ吟味している余裕がなくなり、距離計測を諦めた。

だって、まもなく海岸だ。前だけを見て進もう。

何かしらの施設へと続く広い道路をひたすら歩き、

やつから半径5km以内に突入した。

その時、前方でキラリと何かが光った。金属の輝きだ。

足早に近付いて行くと、俺たちと同じアーマーをつけた生物だと分かった。

少し小さいようだ。キリンじゃない。

でも、コロコロ、ピカピカはまったく同じだ。

さらに俺たちが距離をつめるとその生物が語りかけてきた。

「はずしておくれよお。くるしいんだよお。たのむよお。」

人間だった。

にわかには信じがたいが、人間のばあさんだ。

苦しそうにしている。本当に苦しそうだ。アーマーをはずしてくれと訴えている。

「何故ばあさんが？何の目的で？」

「俺たちと同じ？」

「苦しいんだつたら外してやろうか？」

「でも、今はずしたら、間違いなく一瞬でこのばあさんは死ぬだろう。」

「連れていくか？いや、俺たちの行く手には化け物がいる。」

「じゃあ、置いていくか？！」

2匹は大きく深呼吸し、脳を活性化させながら悩んだ。

幸い大きな道路の上だ。どこからでも見つけられる。

俺は昨日見たニュースを思い出していた。

” 立ち入り禁止区域内への一時帰宅実施。”

避難している連中が荷物を取りに帰ってくるのだ。

やつらは必ずこの広い道路を通る。

アーマーの生命維持システムはまだ稼働している。

エネルギーもたっぷり残っているようだ。

「必ず見つけてもらえる！」

俺はそう判断し、ばあさんをこのまま置いていく事を相棒に告げた。

アーマーを付けたばあさん (2) (前書き)

しきりに苦しさを訴える婆さん。何が起きたかもわかっていないよ
うだ。残していくのか？連れていくのか？意見が分かれる2匹。や
さしいから正義とは限らない。かわいそうだから、親切だから、安
全だとも言えない。熱い議論の中でキリンは本当のやさしさとは何
か？本当に大切なことは何か？を学んでいく。

アーマーを付けたばあさん (2)

ばあさんを置いて立ち去ろうとすると、
キリン2が何か言いたげに俺を見つめる。

「どちらキリン2は反対のようだ。」

動物園にいた頃からキリン2は優しい男だった。
でも、時にその優しさが間違いを引き起こす。

「一緒に連れて行く訳にはいかないか？」

「何だかばあさん可哀そうだ。駄目か？」

俺が首を横に振ると今度は

「そうだ、はずしてやるう。」

「はずしてやれば、このばあさんの願いが叶うんだ。」

とキリン2が言った。

「ありがとうねえ。ありがとうねえ。あんたはほんとに優しい子だよ。」

ばあさんはキリン2の言葉を聞いてしわくちやの顔に笑みをうかべた。

「馬鹿野郎っ！なに言ってんだお前！」

俺は叫んだ。

「優しさなんてくそくらえだっ！」

「うわべだけのヒューマニズム振りかざしやがって！」
「優等生のふりしてんじゃねえ！」
「やつらは見えないんだよっ！感じないんだよっ！」
「でも、あたりに充満してる！」
「俺たちを破壊しようと思ってるんだ！」
「それをとった瞬間、ばあは死ぬ！」
「とった瞬間にだー！」

俺は思わず声を荒げた。

「うわべだけのヒューマニズム?!」
「本当の優しさとは?!」

キリン2は困惑気味に何やら考えている。

「本当に今やるべき事?!何だろう?」
「食べる?寝る?動く? 止まる?死ぬ?いきる?いきる……」
「?!」

「そつだ生きることだ！」
「今の苦しさをやわらげる。そんなのやさしさじゃない。」
「その場しのぎの見せかけだ！」
「今こそ命のなんたるかを本気で考え、生きぬく時だ。」
「生き続ける時なんだ！」

まるで脳みそに雷鳴を受けたかのように。
キリン2の心が目覚めた!
そして赤子をなだめるかのように、ばあさんに語りかけた。

「ばあちゃん、大丈夫だ。」

「ばあちゃんもこんなもん着せられて、いやだったな。苦しいな。」

「でも、もうちょっとの辛抱だ。」

「もうちよとすれば、全部終わるんだよ。」

「俺たちは行かなきゃならない。」

「ばあちゃんがそれを脱げるように、ちょっと用事を済ませてくる。」

「

「そうすればもうそれを取ってもいい。」

「もう、苦しくなくなるんだ。苦しくなくなるんだよ。」

「お願いだからもう少しそのまま居てくれないかい。」

「もう少しの辛抱だからね。」

まるまっした背中を優しくさするキリン2に心を許したのか、ばあさんはうなづき納得した。

正直、キリン2がこんなに上手く年よりを説得するとは思ってもみなかった。

俺は手招きで合図をし、キリン2をこちらに呼び寄せた。

「ばあさんは納得したか？」

と尋ねると、キリン2は目に涙を浮かべ

「これでよかったのかなあ？」

「本当にこれでよかったのかなあ？」

と落ち込んだ。

ばあさんは小さく手を振って俺たちを見送った。何度も。何度も。

ばあさんはどんどん小さくなっていく。そして俺たちはまた、海へと向かった。

“海” “やつ”の方に。

アーマーを付けたばあさん (3) (前書き)

俺の判断は間違っていたのか？それともヤツが馬鹿なのか？まったく元気が出ないキリン？。かわいさ余って憎さ100倍。キリンは愛の叫びを上げる！

アーマーを付けたばあさん (3)

何キロか歩いて、ばあさんはもう見えなくなった。

潮の香りがキツく感知され、海への接近を知らせている。

しかし、キリン2の元気がない。

目はとろんとして覇気が無く、口元は半開き。

俺の後ろを何とか付いてはきているが、なんだかポーンと遠くを見つめている。

ひょっとして、ばあさんの事、まだ気にしているのか？

連れていく事もできない。アーマーを脱がせてやる事もできない。ちゃんとわかっているはずなのに。

俺は、塞ぎがちに下を向きながら歩いている相棒を元気づけようと鋼鉄の尻尾を上下に揺らし、ピコピコッ ピコピコッ とおどけて見せた。

それでもヤツは元気がでない。

今度はびっくりさせてやろうと、いつか使った背中の放水設備でピコウーっとな水をかけてやった。

水柱は放物線を描きながらヤツの顔に見事命中！

しかし、半開きの口元は覇気を取り戻すことはなく。

視線はポーンと遠くに固定されたままだ。

何をやっても駄目。

もういい加減、カツを入れてやろうと、俺はくるりと首を後ろに回し、まくしたてて叫んだ！

「今は非常時だ、前までとは違うんだ！」

「檻の中のあの時とはな！」

「愛想を振りまいていりゃ良かったあの時とは！」

突然の出来事にキリン2はぎょっとして立ち尽くしている。

「わかってるのか?!」

「俺たちは自分の意思でここまで来た!」

「誰に命令されたわけでもない!」

「いつまでもご機嫌取りのちようちん持ちでは居られないんだよっ
!」

「自分達の世界を切り拓いて行かなければならないんだ!」

「俺たちは考えるキリン。自立したキリン。責任を持ったキリン。」

「歴史上はじめて、夜明けを迎えたキリンなんだ!!!」

「よ、夜明け……。」

「夜明けを迎えた……。」

キリン2は俺から何かを感じ取ったのか、また、目にいっぱい涙を浮かべた。

「分かってくれたか。」

俺がニツと微笑みかけると、ヤツもほほに涙をつたわせ、半開きの口元にニヤッと笑顔を浮かべた。

勇者たち (1) (前書き)

いよいよ原発の至近距離までたどり着いたキリン達。否応なしに炎と爆発の中に包まれていく。いよいよもうお仕舞いか?! 彼らは死を覚悟するが……!

大量の煙に包まれながら大きく空気が振動を始めた。空気の鼓動は徐々に振幅を増し、遂にはボーンという巨大な爆発音と共にプラントの屋根を吹き飛ばした。

「核爆発か?!」

「いや違う。」

発散された熱量は小さい。引火による気体の爆発だ。

ここには水素が充満していたらしい。

ぽつかりと開いた天井から“やつ”の笑顔が顔を覗かせる。

どこまでも追いかけてくる不敵な笑い。

それはやがて猛烈な火柱となって俺達に牙をむいた。

上から、横から。

次は下から、斜めから。

鋭い剣の様に突き刺さってくる。

まるで、黒ひげ危機一発ゲームだ。

樽に閉じ込められた海賊には、もはや逃げる道はないのだろうか?! 幾重にも幾重にも攻撃が重なる。

“やつ”は何故、そこまでして俺たちを殺したいのか全く理解できない。

「所詮キリンが2匹いるだけなのに……」

「大した影響力があるとは思えないのだが……」

何回も繰り返される爆発で、建屋と呼ばれる四角い箱は、原形をとどめていられないほど粉々に吹き飛ばされた。

屋根もない。壁もない。鋼鉄で作られた頑丈な骨格も無くなった。

しかし、最も熱を発生させている容器だけは何故だか無傷で残っている。

その丸裸になった姿をはつきりと現すと、怖ろしいほどの熱が発せられているのがわかった。

容器の底はドロドロ、ぐちゃぐちゃ。

放射性物質のオンパレードだ。

ヨウ素。セシウム。ストロンチウム。プルトニウムまで漏れ出している。

「こんなもんが漏れたらもう取り返しがつかないぞ！」

俺は死の灰がもたらす世界の終わりを容易に想像する事が出来た。

しかし、それ以上に現状は苦しい。

何と言ってもダダ漏れの放射性物質で足の踏み場もない。

上からは火。下からはドロドロ。

「もうここまでか。」

俺たちは死を覚悟した。

勇者たち (2) (前書き)

絶望のふちにある麒麟達の目の前に強力な助っ人が現れた！

「何故？」

「何故そんなに戦うの？お前たち、死んでもいいの？」

麒麟は守るべきものと自分の命とを天秤にかけながら、自らの生きる意味を問い直す。

勇者たち (2)

2匹のキリンは死を覚悟し、じつと構えて辺りを見まわしている。その時。「シユウ」。ジユ。」と水蒸気が立ちのぼる音がして、動く物体をセンサーは捕らえた。物体は何体もいるようだ。

「動物?!」

「それとも機械か?!」

2本足で立っているその動く物体は器用に道具を使いこなしている。さらに輪郭を鮮明化し、外見や動きを細かく観察してみた。

「に、人間だ!」

何と驚いたことに、ここには人間がいた。

パリツと糊のきいた作業服でもない。演台の前で嘘ぶいている男でもない。

もちろん小奇麗なアナウンサーでもない。泥まみれになった科学防
御服。

灼熱の炎の中で懸命に“やつ”と戦う勇者たち。

背中には”DENRYOKU”やら“消防”やらと書かれている。色んな種類が力を合わせ、懸命に作業している。

「この施設の人間か?!」

「それとも違う場所からやって来たのか?!」

「なんでわざわざこんな危ない場所に来るんだ?!」

ドロドロになったものはもう2度と固まらない。融け落ちた燃料は

制御できないのだ。
そいつらは被害を最小限に抑えようとしているのか、消火活動をやめようとはしない。

「マジっすかつ?!」

「そんなにまでして何を守ろうというんだ!」

「一番大事なのは命だろっ!」

人間もまだまだ、捨てたもんじゃなかった。

動物園では俺達を置いてけぼりにしたが、ここでは何かを守るために全力で戦っている。

俺とキリン2はお互いの顔を見合わせ少しホツとした。

だが、我々が置かれている状況は相変わらずひどい。あたりには炎。熱。灰。そして残骸。

何よりも、撒き散らされる放射能。

状況を冷静に分析しながら、キリン2と俺はやつらを助ける方法を必死で考えた。

だが、いつこうにいい方法は見つからない。

強靭なアーマーに守られている俺たちと比べて、あの人間たちは軽装備すぎる。

スクリーンに表示される彼らの被曝量はどんどん上がっていく。

「マズイぞ。あんなんじゃすぐにやられてしまう。」

「お前たち!逃げるんだ!もう限界だ!」

と心の中で叫んだ。すぐさまアーマーの外部スピーカーから警告音と人間の言葉が流れる。

「ピーピーピーッ!!」

危ない!逃げる!」

それでも彼らは一心不乱。やつに水をかけ続けている。

やがて倒れる者が現れた。一人、二人、と俺たちの視界から消え、燃え盛る炎に飲み込まれていく。

その時、外部から放水が始まった。

白地に赤い丸のマークを付けた迷彩色の防御服。まだら緑だ！

いつぱい、いつぱい外部に集結している。

「これで助かるかも！」

あるものは地上の放水車から、あるものは分厚い鉄板を腹に巻いたヘリコプターから。

“やつ”に水をぶっかけている。水と炎の激しいぶつかり合い。

一進一退の攻防が繰り広げられるが、一向に鎮火する気配はない。

それにしても、周囲はものすごい放射線量だ。ガイガーカウンターの針はずつと振りきつたまま。

居てもたつても居られなくなった俺たちは、いつか使った放水ポンプをまん丸の背中から突き出して

”やつ”との臨戦態勢にはいった。

しかし、すさまじい攻撃は一向に止まない。

横から灼熱の炎が襲いかかる。配管の亀裂からは高温の蒸気！

俺たちは、右へ左へと攻撃をかわしながら、徐々にやつの心臓部へ近づいていった。

滝のように流れる高濃度汚染水をくぐりぬけ、カラカラになった燃料プールに近づいた。

格納容器の底のほうで、シューーーーーーウツつと言

う音が出続けている。原形をとどめない赤いドロドロが次から次へと地下深くに吸い込まれていく。

その傍らで人間達は次々と地面に倒れこみ、息絶える。

「なんで？」

「何のために????」

命のともし火が、一つ、また一つと消えていく様子を目の当たりにし、またも同じ疑問が頭をよぎる。

「お前たち、率先して逃げた方がいいんじゃないのか！」

この国に住む霊長類は理解しにくいことが多い。
彼らは徳を好む。仁を尊ぶ。

「身を捨てて、浮かぶ瀬もあれ。」

なんて歌が詠まれた事もある。

独特の価値観を尊いものとして脈々と受け継いでいる彼ら。
キリンの世界にはそんなものはない。

サバンナでは危険が迫れば一目散に逃げるのが掟だ。

放射能だらけで真っ赤つかに映るスクリーン越しの人間達は、自分の意思で。自分の誇りで。

命をかけてここにいるのだ。

まるで「戦いを不服とするものは、ここには一人もいない。」
と、俺達キリンに見せつけるかのように。

勇者たち (3) (前書き)

キリンの黒い瞳から大粒の涙がポロンポロンとこぼれ落ちる。一体何があつたのか？ 勇気、死、命、そして愛。2匹のキリンはまた大事な何かを感じ取る。

勇者たち (3)

「うっわあ〜！」

非情な叫びを上げながら俺達の前に人間が転がり落ちてきた。防御服は溶け、生身の体がむき出しになっている。

「大丈夫か?!」

「何とか言ってくれ！」

体を揺さぶり呼びかける。けれども応答は無い。俺は尚も必死で声をかけ続けた。

「おいっ！」

「おーいっ！」

「おーいっ！」

しかし叫びはむなしくあたりに響くだけだった。

彼はマスクに隠れた首をガクリと横に向け、だらんと体を俺にあずけた。

肩をガタガタ揺すってみたが、もう何の反応もない。

人工呼吸? 心臓マッサージ?! 色々な方法が頭をよぎる。

「いいアイデアはないのか?!」

あせったキリン2が俺にせつついてくる。

「もう待ってはられないだろっ！」

「放っておけば本当にこいつはお陀仏だ！」

俺は一か八か、彼の胸元に電流を流す準備をした。
蘇生術の中では最も強力でよく知られている電気ショックだ。
最近では装置もコンパクトになって、こう呼ばれている。

「AED（自動体外式除細動器）。」

このアーマーにそいつが装備されている事は知っていた。
前にキリン2とじゃれあっていた時、わきの下にへんなボタンを見つけた。

それを押してみると手と手の間がスパークした。

面白がって一日中、2匹でバチバチ感電ごっこをしていた事があるからだ。

俺は電極と化した金属の手を人間の胸元に近づけた。

「ショックします。みんな離れて！」

AEDから音声メッセージが流れる。

ビクッ！！ビクッ！！ビクッ！！

人間の体は何回か痙攣した。ピコン。ピコン。とスクリーンに脈の波形が映し出される。

「やったか！」

2匹は歓喜の表情浮かべ、それまでの緊張を緩めた。

しかし、それもつかの間「ピーー」。という連続音が鳴り、波形がまっすぐ平になった。

弱々しかった心臓の鼓動は止まり、彼は完全に息絶えてしまった。

「死んじやったよ……。」

キリン2はいつものように感情を抑えきれなくなって泣いた。

「何言ってるんだ！もう一回いくぞ！」

「絶対にあきらめない！信じれば何でも願いは叶うだろう！」

俺はムキになってもう一度電極を彼の胸に近付けようとした。しかし、キリン2はいつものウルウル目で俺に訴えかける。

「もう静かにしてやれよ。」

「防御服だつて溶けてるんだ。」

「もう戻つて来やしないさ。」

その通りだ。

頑固な爺さんちの婆さんは、ほんの少しの穴が原因で死んだ。

”やつ”は目には見えないから。ましてやこの状況。

少し冷静に考えれば、この人間が息を吹き返す事が無いことぐらい誰にでも判断できた。

「成仏してください。」

2匹は防護服越しに男の顔をじっと見つめ、静かに手を合わせた。男を床に降ろして立ち去ろうとした時、俺はある情景を思い出した。彼が痙攣した時、胸元でキラリと何かが光っていた事を。

首飾りか何かだ。確認してみると胸元にローマ字が打刻された金属片を見つけた。

「認識票？」

情報が出る。

軍隊において兵士の個人識別用に使用されるもの。

5cmほどの銀色に輝く金属の札が多く用いられる。

個人の氏名、生年月日、性別、血液型、所属軍、信仰する宗教などを記す。

JAPAN GSDF

名前、姓……

認識番号……19710313……

血液型……

「JGSDF?」

「ジャンボ・ゴルフ・セール・デザイン・ファンド??」

白い球を細長い金属の棒で打つあれか?その会社の株式担当?まさか株屋がこんなところにはいないだろう?!

「ジュニア、ゴシップ、ディフェンダー?」

少年少女を有害情報から守る組織か?

それはいい!子供たちをしっかり守ってやることは大事だ。

でも、この場所とはしっくりこない。

どこかで聞いた事があるカタ仮名語をやたらめったら並べながら、データベースを検索する。

すると、何だか適合しそうな言葉を発見した。

「JGSDF……」

「一文字足りないけど、まっいいか。」

「じゃぱん・せるふ・でいふえんす・ふあうす」

「ジャパン・セルフ・ディフェンス・フォース。」

J S D F . . . J a p a n S e l f - D e f e n s e F o r
c e s .

1954年7月1日に設立された事実上の軍事組織。
日本の領土・領空・領海を自衛する。

「軍事組織？」

「軍隊？軍隊なのか！」

専守防衛を基本戦略に置く日本の防衛組織・・・自衛隊。

「自衛隊！！！」

ここ日本では軍隊の事を自衛隊というらしい。

ちなみに俺の故郷サバンナでは軍隊をスワヒリ語で「キジェシ」という。

武器を持って戦う戦士の集まりだ。
認識番号を確認する。

「19710313」

それをアーマーが読み取ると、人間の身元が瞬時に目の前に表示された。

出身地 県 市

年齢 35歳

家族構成……妻1人、子供2人。
その他……。

「えっ家族?!子供もいる!」

「何しに来た?!誰の命令で?!」

「ここが地獄だと知っていたのか?!」

「信じられない!愛する者を残してまで来たというのか!」

「かけがえのない子供達も!」

「何故だ!何故なんだ!」

俺は彼の人生に思いを寄せた。

「いつてらっしゃあーい!」

と眠い目をこすりながら送り出す小さな笑顔。

「気をつけてね。」

と、温かくさりげない愛情で夫を見守る妻の姿。

コイツが爆発したあの日の朝、どんな思いでこの迷彩服の男を送りだしたのだろう。

出発前に基地で水杯を交わし、毅然と敬礼をする。

「もう二度と戻れないかもしれない。」

そんな思いをかなぐり捨ててここにやって来た。

片道切符を握りしめ、ホースと水を携えて。

この地獄にやって来た。

「誰の為に?!」

「何のために?!」

分かり切ってはいるが、自己保身の為ではない。
この国の、人々の、そして愛する家族の為に、命を投げ出して働いてくれた。

そう思うと、つくづく俺達キリンの無知を痛感してやまれなくなつた。

俺の目から大粒の涙がポロンポロンとこぼれ落ちる。

伝えたいことがいっぱいあって言葉にならない。

そんな時、代わりに涙が出るものだ。

「ありがとう!」

「ありがとう!ありがとう!ありがとう!」

何故だか無性に心が熱く、切なくなつて、

俺は横たわる人間のオスを無意識にキツく抱きしめていた。

あやつり人形 (1) (前書き)

「しかしながら、俺たちはなんでこんな危険な場所にいるんだ?!」
キリンは根本的な疑問にぶつかる。

まさかヒューマンドラマに参加するためではないだろう?!
キリンは自分自身に本当の目的、本当の真実を問い直す。

あやつり人形 (1)

「しかしながら、俺たちはなんでここにいるんだ?!」

俺は急に現実に戻され自分自身に質問した。

まさか感動の人間ドラマに出演する為?!

いいや、違う。海に行きたかっただけ。ただそれだけ。
こんな危険なところをわざわざ通る道理も義理もない。

「誘導ミスか?!」

核物質まみれの建屋中心部を突っ切ろうとしているキリン2匹。
実に滑稽だ。

アーマーのヘルメットには相変わらず大量のデータが流れ出て、
行くべき方角を表示する。

ピコン、ピコン、ピピピピピ。。。。。

高周波の信号音が「早く、早く。」と、俺達をせかす。

そして、答えを探している。

でも、なんとなくおかしい事は気付いている。

なんとなく。なんとなく。。。。。

ぼーっとしている俺をたたき起こすかのように、再び大きな爆発が
起きた。

大きな大きな爆発だ。

「今度こそ本当にお陀仏か?!」

でっかい衝撃は、熱と灰を撒き散らしながら建屋を完全に吹き飛ば
し、

辺りを火の海へと変えていく。

「あいつらはどうする?! 人間達!」

「助けに行くか?!」

やっぱりキリン2だ。本物のセンチメンタリスト。

「馬鹿言うんじゃない!」

「死に行きたいって言うのか?!」

俺は彼の意見を一蹴した。

「人間達も全滅だな……。」

お決まりのウルウル黒目で、キリン2は俺を見つめた。

まっすぐ伸びたキノコ雲は、新しい一体の巨大な化け物となり、俺たちを強烈に威圧する。

空いち面を覆い隠すどす黒い灰とすず。

黒い雲がどこもかしこも暗黒の世界に包み込んでいく。

どんどんと、どんどんと、大きく広くなって、

もはや地球を全て覆ってしまうのではないか?!と思うほどの巨大怪物に成長した。

そいつはまるで人間達の知恵と文明をあざ笑うかのように、勝利の歡喜をあげている。

「でも、どうして人間達の戦いに俺たちキリンが巻き込まれているんだ?」

釈然としない気持ちに包まれた俺は

「これって、本当に俺が望んだ事なのか？海に行きたいという俺の夢？！」

「本当に俺の意思？！」

と、アーマーのコンピューターではなく、自分自身の胸に問いかけていた。

あやつり人形 (1) (後書き)

次話「あやつり人形(2)」で、何故キリンがここ来たのか？いよいよ明らかだ！

あやつり人形 (2) (前書き)

俺たちは本当に自由なのか?! なんだかおかしい気がするぞ?!

「marionette」と言う意味ありげな単語。

ここは原発中央部。

もっとも危険で、もっとも重要な施設の中で、キリンは重大な真実に直面する!

さて、お気楽キリンはどうなる!

あやつり人形 (2)

アーマーの高速でミスのないプロセッサは、なんだか困惑気味だ。俺の要求は、そんなに君を苦しめるものだったのか？！

「どこかにウソがある。確かめたい。」

そう思った俺は、アーマーのプロセッサに全神経を集中させながら今まで起こったあらゆる出来事をリロードし、再解析した。目の前に流れ出る膨大な量のプログラムが俺の脳幹に飛び込んでくる。

「!!!.....」

「おかしいぞ!!!!!!」

「ここに絶対に何かある!!!」

解析も中盤に差し掛かった、20京11兆3億と11番目の行の中。ひときわ目立つ、おかしな言語の記述を見つけた。

「VNC.....MARIONETTE.....」

それは明らかに他の単純なプログラムには見当たらない長くて複雑な文字列だった。

俺が動物園を出て、海に行く事を決心したあたりの行。

そう、脳が機能しなくなって、顔を緩めてよだれを流していた時や、危険な半径10km以内に進入した時。

それに死の灰を避けてプラント内部に逃げ込んだ時など。

俺が何か重要な判断した時には必ずそこに記されている。

どうやら、外部からの通信によって埋め込まれたものらしい。

それは俺がとつてきた行動に大きく影響を与えてきた紛れも無い痕跡であり、

何者かがこのアーマー型の装置を操っていた疑いの無い証拠だった……。

そして確信が持てた。

「自由じゃない……。」

そう。自由なんかじゃなかった。

檻から解放された俺達は、やっぱり囚われの身だった。

動物園を出た時の言いようもない開放感も、希望に満ちた夢の冒険も、

全部ウソツパチだった……。

ピンチに出会った時の驚きも、悲しみも……。

全部仕組みられたストーリー。

誰かの描いた物語の上を、ペン先でなぞるように操られていたのだ。

「そ、そんな……。」

キリン2は、またいつものウルウルだ。

「この装置は、正義の味方では無かった。」

「頑強で安心安全な鎧でも無かった。」

「俺達を守る事が目的じゃなかったんだ！」

「じゃあ何のためにこれを着せたんだ?!」

「一体誰が?何の為に?!」

俺は腹の底からわき上がる怒りとともに言いようもない悲しみに襲われた。

本人の意思とは全く無関係に動き、進み、巧妙に海の方角へ向かわせる。
そして気付いた時にはもう手遅れ。到底、後戻りなんかできやしない。

「本当の目的地はここだったのか……。」

ここは光り輝く海なんかとはほど遠い、原発内部のコントロールセンター。

格納容器のすぐそばの部屋。

地獄の真っただ中だった……。

あやつり人形 (2) (後書き)

何故?! 何のために?! 御用学者がチクリと刺して行ったチューブは脳幹にまで達していた。どのだれかは知らないが、何故俺達がこんな目に!! 次話「キリンの夜明け(3)」でキリン達のミッシヨンが明らかに!

私達は本当に自分の意思で生きているのだろうか? ひょっとして誰かの描いたストーリーにあやつられていただけ?

巧みに誘導され、無知のまま生涯を送る……。

キリンは代弁者となり叫びます!

あやつり人形 (3) (前書き)

コントロール。行動だけじゃない。進路だけじゃない。俺たちは意識までもコントロールされていた！虚無の世界に襲われながら、現実^ニに直面する2匹のキリン。これからどうなってしまうのか！原発中心部でキリンが叫ぶ！

あやつり人形 (3)

センターはまさに原発の中枢。

ここは分厚いコンクリートと何層にも重ねられた鉄板とコンクリート、

それに加え、鉛や天然重晶石を熱く塗り重ねた強固な部屋。

俺達がその重々しい金属の扉に近づくと、アーマーから自動的に赤い光線が放出された。

「ピッ！」と言う認証音が鳴り、ドアのロックが解除される。

音を立てる事も無く、重厚な扉がスルスルと開いた。

まるでお化け屋敷のドアのように……。

「俺、入るの嫌だ！」

キリン2が足をバタつかせ抵抗した。

しかし、所詮、無駄な抵抗。俺達になすすべも無かった。

アーマーは何事も無かったかのように、自然と中へ入って行く。

「ま、まじで！」

「もう俺達の意味は通じないって事?!」

キリン2は事態の急展開についていけない様子で、ビビりまくって言った。

「もう、仕方ないか……。」

「ここまで来ちゃったんだ。入るしかない！」

俺は持ち前の好奇心を發揮して、中の様子を覗き込んだ。

部屋の内部は以外にも綺麗だ。

あんなにひどい爆発があつたのに、損傷の形跡は微塵もない。全く不思議なもんだ。

「こんな頑丈に作れるの?!」

「じゃあ、はなから全部、壊れないように作れよ!」

根本的な疑問が俺を苛立たせる。

「よっぽど大事なものがあつたんだな。」

「だからここだけやけに頑丈に作っている。」

「誰にも渡せない何かキットある!」

大事なものは一体何だろうか?

何人も人間が死んだ。犬、ネコ、鳥、虫。そして植物。いくつもの命が無くなった。

「命より大事なもの……。」

「人間達はそんなものを持つてるのか……?」

キリン2と顔を見合わせながら熟考に熟考を重ねた。

2匹は脳をフル回転させたが、なかなか結論が出ない。でも、一つだけ見えてきた事がある。

そう、ここには爆発当時から今に至るまで、全てのデータが保存されている。

何台も列をなす最高のスーパーコンピューターがある。門外不出のブラックボックスだ。

「なんか嫌な予感がするな……。」

俺達は無意識に進んでいき、計器類がたくさんついたコントロール

ボックスの前まで到着した。
すると、なにやら2匹の胸元でカチャカチャ音がし始めた。
それと同時に、首の下からニョロつと何かが姿を現わす!!

「ギョツ！」

「へ、蛇!!!」

嫌な予感の中！ビックリ箱から蛇が飛び出した！

「オーマイガー！」

キリン2は恐ろしさのあまりブルブル震えたが、蛇はお構いなし。

「キュイーン。」

「シユルシユルシユル。カチャ！」

コントロールボックスに付いている金属製の丸い穴に顔をズツポリ突っ込んだ。

「ピピピピピピピピピピ……。」

大量の信号がこちらに転送され、次から次へとアーマーのメモリーに保存していく。

「これが目的!!!」

「御用学者たちはこのデータが欲しかったんだ！」

「俺たちに意志なんてなかった……。」

「最初から仕組まれていたんだ!!!」

ここへ向かうように誘導され、その目的をあからさまに目撃した俺

は、何だか無性に腹が立った。

あんなに、あんなに憧れていた海。光り輝くサンシャイン。
夢も、希望も全部ウソっぱちだった……。

2匹はお互いの顔をマジマジと見つめながら、まん丸黒目に涙を浮かべた。

あやつり人形 (3) (後書き)

次話「あやつり人形(4)」で、キリンは本当の幸せとは何か考
えます。

あやつり人形 (4) (前書き)

本当にあやつり人形だった。知っていたか?!俺たちの繁栄が!俺たちの栄光が!あの恐ろしい”やつ”によって支えられてきた事を!キリンは自分の無知を知り、もう一度自分自身に問う。そして深い闇の中で、もう一人の自分にめぐり逢い・・・・。。。

あやつり人形（4）

「ピーーーーーーーーーーーー！！！」

耳をつんざくような大きな警告音が鳴り響き、転送完了のサインがスクリーンに表示された。

” Warning ! ” 赤いランプの点滅とともにコントロールボックスからつつすらと煙が上がる。

またも嫌な予感。

「危ない！」

「ドンツ！！！」

小さな爆発が起き、さっきまで目の前にあった大量の設備がごとごとく破壊された。

強い衝撃波は俺達をふっ飛ばし、あたり一面を瓦礫だらけに。

俺は運良く開きっぱなしの入り口から部屋の外に転げ出た。

しかし追いたてるように爆発は襲ってくる。

部屋から炎が噴き出し、廊下をくまなく焼き尽くした。

それから何度となく同じような爆発が続く。

まるで何もかもを隠滅したがつているかのように・・・。

連鎖的に立ちのぼる火柱が灼熱の渦となって俺に襲い掛かった。

「ここを乗り切らなきゃ駄目だ！」

「ここさえ無事に抜け出せばなんとかなる！」

自分自身に気合を入れた。

が、どこかに頭でもぶつけたのか、徐々に意識が失われていく。

そして、何だか心地よい気分に含まれ、深い深い闇の中にいざなわ

れていった。

ぼんやりした頭の中で、今までに経験した自分の人生、いや！キリン生がグルグル輪になって駆け巡る。

「これは夢か？現実か？」

しばらくすると、暗闇の中にフォーマルスーツを着こなした、もう一人の俺が現れた。
冷静で冷ややかな声。

「よく聞こえない。」

「何を話してるんだ?!」

耳を澄まして聞いてみると、どうやら過去の出来事を回想しているようだ。

シビアに、そして淡々と……。

「すべて嘘だったのかもしれない！」

手に差し棒を握り締めた人間型の俺は、毅然と聴衆に言い放った。
そう、俺の送ってきキリン生活は、まるで「あやつり人形」のようだったと……。

檻の中にいれば食べ物人間が運んでくる。

エネルギーもバンバン使えた。

あの2本足達は幸せそうに俺達を見にやって来る。
頼んでもいないのに。

動物園ではしつぽを振ったり、首を伸ばしたり。

愛想を振りまいていたら、自動的に生活は成り立っていた。

特別な困難もなく、だらだら生きている事が出来た。

キラキラにライトアップされた夜の動物園。

俺達は最高に輝いていた。

まさにそこはキリンにとって最高のステージ。

しかし、使用するエネルギーは膨大だ。

サバンナ生活の何億倍、何兆倍だったのだろうか。

それを支えていたのはまさにこの化け物。

” やつ ” なのだ！

暴れ狂う” やつ ” ！ ” やつ ” そのものなのだ！！！！

普段は意識する事は無い。

どこでどんな風にうごめいているのかも知らなかった。

いや、そうじゃない！俺たちは知ろうともしなかった！

そして、今、” やつ ” は怒りに満ちて爆発した！

もう2度と戻る事はできない。

“ やつ ” の死と引き換えに、あの最高のステージは無くなった。
きらびやかな照明もなくなった。

華やかなパフォーマンスも。

子供たちの歓声も。

胸躍る明るいバックミュージックも……………。

「何もかも無くなったんだ……………」

一通り解説を終えると、もう一人の俺はスーッと姿を消した。

グルグル駆け巡る思い出の世界もそれと同時に終わりを告げた……………。

華やかな夜の動物園も閉園し、人っ子一人いなくなった。

静寂だけがシーンと残る。

無人となった動物園は、静かな静かな原始の森へ徐々に姿を変えていった。

あやつり人形 (4) (後書き)

次話。夢の中でへんてこな事実に向面したキリンは人間達のエゴに怒りの声をあげる！

夢 (1) (前書き)

気を失ったキリンは夢の中で、ある光景を目撃する。
そこには人間達のエゴが充満していた・・・。
ホント、呆れて物も言えない・・・。

夢 (1)

原始の森をくぐり抜けると、闇の中にモワモワっと雲が立ち込めた。真ん中に何かが見える。

なんとなくぼんやり映し出されたその光景は、いつかどこかで見たような気が……。

朝方のまどろみの中。

そう、

途中になった夢の続きを何かのきっかけでもう一度リプレイしてしまったようなあの感覚。

「あつ、そうそう、これこれ、さっき、これあつたよな。」

つてやつ。

雲の真ん中に人間達が見える。

楕円形のテーブルを囲んで、しきりに何か言い合っている。

ある者は誰かを指さし罵倒している。

ある者は口をへの字に曲げてむっつり顔。

みんなの真ん中に座っているトロンとした顔のおじさんは、

じっと目を閉じ、腕をくんでうつむいている。

「寝てるのか?!」

「起きてるのか?」

まあ、なんともお気楽な……。

議論の内容をよくよく聞いていると、

どうやらおじさん達の群れは、お偉いさんの集まりと分かった。大事な会議の真っ最中だ。

「あいつはどうなってる?!」

「ほら例の。」

「あの、あのアーマーを着せた動物!」

「ほら、あのキリンだよ!キリン!」

「あれはどうなってるんだ!?!?!?!?!」

「まったくなしのつぶてでして……。」

「いい加減な事を言うなつ!」

「同盟国から矢の催促だぞ!?!?!」

真ん中のトロンとした彼が立ちあがって言う。

「えゝその件につきましては……。」

「つ・き・ま・し・ては!」

「私のところに何の情報も、入っておりません!」

「すべては、私の言う事を聞いてくれない意地悪な人達の責任です。」

「私はちつとも悪くありません。」

俺の意見は、「だから?」だ。

とつても都合のいい言葉。

なんで、すくつと立ってすぐ言い訳?!

「情報が入っておりません。」って、情報が無いと、責任も無い・
・?つて事?

「はあ?」

「あなた、この国のトップじゃないですか!」

「知らないじゃ済まされませんよ!」

まくしたてるおやじ達。

「え、その件につきましては……。」

「つきま・ま・し・ては!」

「私も最善の努力をいたしておるところで、あります!」
「が。」

「みんなが、私の言うことを聞いてくれません!」

「の・で。」

「どうすることも出来ない!」

「の・で」

「あります!!!」

「……。」

だから、いったい何を言いたいのか。

そんなことは言われなくても見たら分かる。

居合わせた全員、目が点……。

「だからねえあなた……。」

呆れてものも言えない。

目の前で繰り広げられる関西風の新喜劇。

笑ってよいのか、悪いのか?

悲しんでよいのか、悪いのか?

一体どうしたらよいのだろう?!

この前、死んだロック歌手が“呆れてものも言えなくいく!”なんて歌ってた。

多分、彼もこの状況に似た場所に居合わせたんだろう。

「やまし」だらけのこんな場所にね。

停滞した状況に堪えかねたのか、仏頂面のおじさんが叫んだ！

「こんな事をしているとねえ〜。票が減っちゃうんだよ！……！」
「票がつ！……！」

「怒っても仕方がないだろ……。」

そう思いながらも、俺は心の中で言っただけ。

「豹って、お前、見たことあんのか?!」
「俺と同じ黄色に黒の点々、しかも早え〜やつ!」
「減らねえっつーの!!豹はっ!!」
「豹はサバンナだっつうの!!」
「サバンナッ!」

156

昔から声高に叫ぶ人は、何か別の目的を持っている。
叫び声は、ただのごっこ遊びで、真実は全く別。そんな事はわかってる。

だから「票と豹」の違いくらいどうってことない。
このおじさんの本心もどうでもいい。
どっちみちあんたを変えることなんて出来やしないだろうから……
……。

「数が、力なんだ!」

「選挙はウかつてナンボなんだよ!ナンボ!」

「まったく君ら、勉強不足だよ!……!」

「ウかる???」

「鵜・狩る??」

鵜が狩りをするのか。

それだつたら、俺も知ってるぞ!

ちよつどこの国の真ん中ぐらい。日本アルプスっていうのかな?!
でつかい山よりちよつと左下のほう。

何とか川で、船の先にたくさん鳥を付けたアレだ、アレ!!!
かがり火を焚いて、腰蓑をつけた人間が淡水魚を捕まえるアレ。

「う・か・い。」

「鵜飼い!」

でも、何でこのおじさん、選挙で淡水魚を取るのだろう?

塩焼きにして配るのか?

それは駄目。

有権者に物をあげると選挙違反になってしまう。

怒ってみたり、冗談を言ってみたり、よくわからない連中だなあ。

俺は、必要以上にデカイ声で

「お前らはおかしい!!!!!!」

と叫んでやった。

でも、彼らにも得意技はあるようだ。

敵を呆れさせ、骨抜きにし、戦闘能力を奪っていく。

だらだら、だらだら、時間を遅らせて、

みんなの記憶力・思考力を低下させる。

そのテクニクはキリンには無い。

「すごいぞ!」

「すごすぎるゾー!!」

「なんてすごい技なんだ!!!」

俺はなんとなく“やつ”が爆発した理由を感じ取っていた。

自分達が「やつちゃった事」を会議室でなすりつけ合いながら、

“やつ”の事を見て見ぬふりしてたんだ。

責任を擦り付け合っているうちに、

もうどうしようも無くなったんだな。

そして“やつ”の怒りは爆発した。

「だからと言ってキリンにケツを拭かせる?!普通?!」

「呆れてものも言えない……」

エゴにまみれた2本足の生物……。

そんな人間達が急に悲しい存在に思えた。

呆れてものも言えなくなつて黙りこくってしまった俺は、

また、真っ暗で静かなレム睡眠状態に落ちていった。

夢 (1) (後書き)

再び深い眠りについたらキリン。夢の中で、また面白いものを見つける？！

夢 (2) (前書き)

ぼんやりと浮かび上がる物体はどこかで見た四角い箱。何かが映し出されている。”ヤツ”について解説しているメガネのおじさんは寂しげに故郷の村を去っていった……。

夢 (2)

あれれ、遠くにまた何かが見える。
ぼんやりと浮かび上がる四角い箱。
フニヤフニヤと揺れながら、徐々に輪郭が姿を現した。
正面の真ん中に何か見える。うつすらと人影の様な何かが……。
よく見ると顔のようだ。しかもキリンでは無い。
人間だ。悲しみを背負った2本足。

「ひよっとしてテレビ?!」

「見たことあると思ってたんだ!」

それもそのはず、目の前にある四角い箱は、この前拾ったテレビそのものだった。

テレビの中ではコミカルな掛け合いが繰り広げられる。

ひな壇におじさん達が並んでいて、真面目に話したり、納得しあつて微笑みあつたり。

おばさんも座っているぞ。うるさそうな感じだ。

前列のおじさんが後ろを振り返って怒ってる。これはやばい。

上の段の端っこにはお姉さんがいる。

ポニヨンとして、愛くるしい。前列のおじさんは彼女が大のお気に入りようだ。

本当にいろんな種類が揃っている。人間展覧会。

これぞ、まさに生物多様性と言うべきか。

サングラスをかけた短髪のおじさんが騒ぎ出した。どうも彼が一番偉いらしい。

「司会者っていつのかな?!」

時折、扇子でどこかを指したり、開いて自分を扇いでみたり、ひな壇の前をせわしく動き回っている。
ハイパフォーマンスな人間のオスだ。
演台では誰かが何かを主張している。
メガネをかけたおじさんが猛烈に熱く語っているぞ。
目じりを下にして、にこにこしながら、毅然と語る。

「ヨ―素を配れ．．．」だの
「バイクを配れ．．．」だの
「何とかカントカetc．．．」

「絶対に壊れないものなんてないんです！」
「もし、壊れたらどうするんですか？と、私は聞いたんです。」
「じゃあ、相手は壊れないと言う。」
「だから、もし壊れたらどうするの？！と私は聞いたんです！」

メガネおじさんは声のトーンをだんだん高くし、叫んだ。

「ひよつとして、“ヤツ”が壊れた話？！」

俺はピンと来た。そう、この世の中に「絶対」は無い。
自然のなりわいは神のみぞ知る。
でも、“ヤツ”を作った人間達に自然の法則は当てはまらなかったらしい。

「絶対に壊れません。」
「壊れないから安全です。」
「安全だから大丈夫です！」
「大丈夫だから、壊れません！」

「こわれたやん……。」

俺はサングラスの司会者に影響されたのか、関西弁のため息混じりに言った。

しかも、壊れた後はこうだ。

「メルトダウンはしておりません。」

「安心して下さい。」

「放出された量は微量です。」

「安心して下さい。」

「健康に対して直ちに影響はありません。」

「安心して下さい。」

まるで、神様にでもなったように発表し続けた。

いや、神様だったのかも知れない。

少なくともしばらくの間は……。

だって、安全だって言い切れるんだから。

「安全神話」なんて言葉もあつたくらいだ。

「神話ですよ！神話！」

「神話って、作り話でしょ！ほんとに俺達、安心できるの?!」

俺は不思議で不思議で仕方がなくて、長い首をかしげて悩んだ。

メガネおじさんはこの国にウソつきがいっぱい居ると言っている。

“ヤツ”は最初から壊れるように作られてたと言う。

小さい揺れしか想定してなかったんだって。

ジャパニーズトラディショナル「TSUNAMI」も来ない事になつてたんだって。

「ウソ？」

「ホント？」

「ホントに想定外だったの?!」

メガネおじさんの言う通り、みんな本物のウソつきなのかも知れない。

だって、俺見ちゃったから。

邪悪な雲が手招きして俺達を呼んだのも。

きのこのような大きな大きな灰色の悪魔がドーンと立ちふさがったのも。

全部見ちゃったんだよね。

そして線量計の針は振り切ったままになった。

メガネおじさんは言う。まだまだ言う。

「大切な子供たちを守るう！」と。

よくよく話を聞いてみると、昔はみんな仲間だったんだって。

メガネおじさんも神様達も。

メガネおじさんは悪魔に魂を売りたく無かったから、故郷の村を出たんだって。

村の名前は「原子力村」。

村人達は原子力を平和利用して、明るい未来と科学の発展、人類社会の福祉に貢献するつもりだったらしい。

象徴的なキャラクターは力持ちの男の子だ。

右腕を大きく前に突き出して、足の裏から火を吹いて飛んでいく。

正義を貫くかわいい坊やだった。

名前はアトモだったっけな?!ア・ト・モ。

そう言えば昔アダモちゃんってのが居たな?!

「アゝダモちゃんっハイッ！」

て、いつも言ってた。

あの原住民は随分と人間らしかったな。だつて、自然そのものだもの。

「アゝダゝモゝスゝテゝ！！ ペイ！！」

とも言っていたぞ。

日本語に訳すと

「あんだなんか知らないよ。ふん！！」

という意味らしい。まさに村を出て行く時にピッタリの挨拶だ。

「お前らの行動は、もはや理解できない！ ペイっ！！」

つて感じ。

メガネおじさんが出て行った原子力村には沢山のキャッシュユが集まるらしい。

たいそうお金持ちの村だそうな。

「集めたお金はどこに行っちゃったの？！」

「街はこんなに壊れてるのに。」

「そのお金で早く直してあげて下さい！！」

そして神様達に言いたいのです。

「アゝダゝモゝスゝテゝ！！ ペイ！！」

「あんだなんか知らないよ。ふん！！」

もう、どうにもこうにも愛想が尽きて

俺は「ペイツ!!」のところで唾がはじけ飛ぶほど叫んだ!

テレビをのぞいてみると、メガネおじさんの順番は終わるみたい。
キツネ目のオスが

「はいっ、それでは次のテーマに移りたいと思いますっ!」

と言って、順番を終わらせちゃった。もっと見たかったのに……。
キツネ目と言え、お菓子屋さんから大金を取ったやつもキツネの
ような目をしていた。

俺達キリンはクリクリお目目だから、犯人ではない。それに正直だ
し。

ひょっとして人間達はキツネと共通する遺伝情報を持っているのか
な。

それを言うならタヌキとも。だってウソばかりつくし、すぐに人
を化かすから。

人の心を迷わして正常な判断を狂わせる……。

「さらば原子力村……。」

メガネおじさんが目じりをたらして寂しそうにそう呟くと、周りが
急にシーンとなって、

テレビの電源はプツンと切れてしまった。

俺の脳みそでは、神経軸索：AXON が「あんなんか知らない
よ!ふんっ!」

という強い信号を出力し続けている。そして、残された暗闇には
「ペイツ!!」の響きだけがいつまでも、いつまでも、こだまして
いた……。

夢 (2) (後書き)

「あんなんか知らないよ。ふん！」って神様気取りのやつらに言
ってやるう！脱原発！！

「ア〜ダ〜モ〜ス〜テ〜！！ペイ！！！」

夢 (3) (前書き)

麒麟達は空を飛んでどんどん上昇していく。すると今まで知らなかった事実が明らかになり！真実を目の当たりにした2匹は自分達の存在について悩む……。世の中はこんな風になっていたのか？！

夢 (3)

今日、俺はキリン2と共に空を飛んだ。

体がフワツと浮きあがって、高く高く飛んでいった。

すると背中に一对の白い羽が生えた。キリン2にも生えている。

俺達はお互いの背中に生えた変テコな羽を見て「クスッ」と笑いあった。

「何の光りだろう?」

キラキラと光の粒を輝かせながら、温かくて柔らかい光線が俺達を包み込む。

真上から降り注ぐ光に導かれ、俺達のはぐんぐん上昇していった。

原発プラントは豆粒のように姿を変え、豆粒から白いゴマ。

白いゴマから塩の結晶。とどンドン小さくなっていく。

そして、ついに何も見えなくなった。

瓦礫になった町も、爆発の形跡も、何もかも見えなくなってしまった。

何回も何回も雲を突き抜け、さらに上へ昇っていくと、海岸線が海と陸地を真つ二つに分けた。

燃えさかる爆発の炎なのか、一筋の赤い線がクツキリと輝いて見える。

大きな大きな海の青と、美しくきらめく山々の緑。

「さっきまでの地獄が嘘のようだ・・・。」

「本当にあそこで何か起こっているのか?!」

俺は信じられないほどの美しさに心を奪われ、今までの現実を疑った。

「うっ！周りが見えなくなっただぞ！」

「おいつ！相棒！いるか？！大丈夫か？！」

濃厚な水蒸気に包まれて、辺りが真っ白になる。

白くなり、黒くなり、また白くなり……。

最後の雲を突き抜けると、海の中にタツノオトシゴに似た小さな竜が姿を現した。

西の大きく広がる大地と東の大海原に挟まれて、必死にもがきながら泳いでいる。

こうやって遠くから竜を眺めていると、平穩そのもの。爆発以前と何も変わらないようだ。

「本当は苦しんでいる仲間が沢山いるのに……。」

まだまだ、ぐんぐん昇っていくと、今度は端っこが丸くなって、大地と海が暗闇の中で輝く青いタマになった。

タマはうっすらと白い輝きを放ちながら、ゆっくりゆっくり回転している。

「なんだこれ?!」

「俺達こんなタマの中にいたのか?!」

俺は海や大地が世界の果てまで、限りなく平らに広がっていると信じていた。

もうこうなってくるとすべてが理解不能だ。

周りは真っ暗だし、おまけにこのタマ……。

現実の世界と夢の世界。俺は夢遊病者のように両方の世界を行き来する。

「地球は青かった……。」
「他に比べようもないほど美しい……。」

”ヤツ”の兄弟を爆発させた、どっかの国の誰かが言ってたっけ。
目の前に広がる黒と青。

俺達は大きく雄大な光景に圧倒されながら、自分達のちっぽけさを
痛感させられていた。

「それでも地球はまわっている。」

「長靴の形をした国で、髭のおじさんが言ってたよ。」

キリン2が物知りついでにボソツと呟いた。

「何のこと？」

俺は尋ねたが、彼は

「ま、いいさ。もう関係ない事だから。」

と一言いうだけだった。

青い玉の周りを小さい玉が回っている。

これはサバンナでも見たことがある。

ウサギの住みか。彼らは餅をついて食べている。

その後ろには金色の玉。表面では、すごい速さで黄色い雲が流れて
いる。

その輝きは、まるで神話のヴィーナスのように美しい。

そのまた後ろには水色の玉。

極めつけは一番奥にある燃えさかる玉だ。すごい熱と光を発しながら、
メラメラと輝いている。

表面のいたる所から火柱が噴出し、放物線を描きながら出たり入っ

たり。

不思議な物体だ。でもなんだか暖かくて、親しみを感じる。いつもどこかで一緒にいたような……。

「ひよつとして、これがお天道様?!」

久しく拝めていなかったが、まさかこんな所で出会うとは。

「地上で見ていたまあるい光はこれだったのか!？」

その時、アーマーが反応し、情報が映し出された。

熱核融合反応……。

超高温により起こる核融合……。

陽子・陽子連鎖反応CNOサイクル et cetera et cetera……。

「熱核融合反応?!」

「核?!」

「核つて、じゃあ、“やつ”と同じじゃないか!！」

俺は目を疑ったが、これが事実のようだ。

世の中には分からない事が沢山ある。特に人間達のやる事は難解だ。

「彼らはお天道様を作りたかったのか？」

「お天道様を作り出して、神にでもなつたつもりだったのか?!」

人間達は“やつ”を爆発させてしまった。壊れたら止められない悪魔のマシンを。

それはそれは恐ろしい事が起こった。悲しい悲しい出来事も沢山起

きた。

でも、毎日暖かく俺達を照らしていたお天道様も、実は“やつ”と同じだった……。

あの暖かいお天道様も……。

「フツ……。」

俺はお天道様を見つめながら少し寂しくなって、悲しいため息をついた。

夢 (3) (後書き)

キリンたちの背中に羽が生えた本当の意味は?!なんで空なんか飛んじゃってるの?!次話。「夢(4)」で、悲しい悲しい出来事が起こる!

夢 (4) (前書き)

背中に生えた羽……。一体何の為に……。偉人たちの言葉を思い出しながら、俺と麒麟2はある運命に……。そして別々の結末が2匹を襲う！

夢 (4)

一体どこまで来てしまったんだろう？

俺達はお互いの顔を見合わせながら、グルグル、グルグル、軽快に空を回り続けた。

今まで経験したことの無い不思議な世界に身を任せ。

「もう、何もかも忘れてしまいたい……。」

と、ふと思った。

上昇するにつれて、何かに吸い込まれていく感覚が増す。

心地よいハイな気持ちで満たされていく。

全部が、そう、全部がまるで？であったかのように……。

「何もかもが遠くで起きている他人事でいいのかな。」

「今の俺達は違う世界に誘われたんだから。」

キリン2がポツリと言った。

本当にそうだ。あの地獄とはかけ離れたフワフワと気持ちのいいこの空間。

見たこともない世界。しかもキリンに羽まで生えて、まさに天国！

！パラダイゾー！！

すべてを忘れて、無関心と言う邪悪に誘われて……。

この心地よい世界に留まりたい気持ちで胸がいっぱいになる……。

「違うだろっ！！」

俺はキリン2に向かって叫んだ！

そして尻尾でバチンと自分のケツを叩いた。

途端に「ビクリ。」と自律神経が反応し、脳は現実を呼び覚ました。

「危なく悪魔に魂を売り飛ばすところだった……。」

俺達が何も見ないフリをして、幸せそうに空を飛んでいる時も苦しんでる人たちが沢山いる。

地上の太陽を作り出した2本足は

「もう済んだ事じゃないか。」

と全知全能の神「ゼウス」にでもなったかのように“ヤツ”の仲間をまた動かそうとしている。

タツノオトシゴから新しい“ヤツ”の兄弟を連れ出して、どこかの国に同じ恐怖を持ちこもうとしている。

「本当に済んだ事なのか？」

「もう何も無かった事にしていいの??」

「じゃあホツトひと息。ジョージア……。」

「違う!違う!」

「無関心ではいけないんだ!!!」

そう叫んだ瞬間、俺は一瞬だけ本当の記憶を取り戻した。

「熱いつつ!!!」

「そ、そうだ!」

「俺は火の海の中にいるんだ!」

すると背中から何かが抜け落ちた感じがして、天子の羽がスツと消えて無くなった。

「えっ??!」

「何?!」

「落ちるって事!?!」

「どこ行つた?! 天国は?! 夢の世界は!?!」

俺は動揺し、全身をバタつかせた。

「ア、アゝしゝ!?!おっ!落ちるっ!?!」

俺はすごい速さで真つ逆さまに落下していく。

「あいつは?!」

「俺の相棒はどうなつた?!」

キリン2の背中には羽が生えたままだ。

「えっ??!何で?!」

「俺の羽、無くなつただけど?!」

相棒は、白く輝く2つの羽をはばたかせ、上へ上へと上昇していく。

「おゝい!待ってくれ!」

彼は俺を無視して、一直線に昇っていった。

そして、どんどん小さくなって、ついには見えなくなってしまった。
俺の大好きな相棒キリン2。

俺を置き去りにして、天空の彼方へと消えてしまった。

「おーい!」「おーい!」「おーい!」「おーい!」

何度叫んでも、あいつには何も聞こえない。
そして俺は落ちていく。相棒とは反対方向に。
落ちる。落ちる！すごい速度で落ち続ける！
地上にある何もかもが大きく大きく映し出されて、原発の炎まですぐそばに迫った。

「もう駄目だ！！」

「落下の衝撃に絶えられない！」

「さようならキリン2・・・。」

「さようなら俺を愛してくれたすべての仲間達。」

「愛しています・・・。アイ・ラブ・ユー。」

「アイ・ラブ・ユー」 今だけは、悲しい歌。聴きたくないよ・・・。

民家の軒先で傷だらけの全裸をさらし死んでいったある歌手の歌が頭の中を駆け巡る。

俺は盗んだバイクで走りだしている黄色い自分を想像しながらその歌をバックミュージックに、ダイニングメッセージをアーマーのメモリーに保存した。

「愛というのは、どんどん自分を磨いていくことなんだよ・・・。」

そして数秒後、あまりにも凄まじい重力加速度にコクリと気を失ってしまった・・・。

夢 (4) (後書き)

俺は下に。キリン2は上に。ついに本当のお別れが来たのか！恐ろしい速度で落ちていく俺。「このままじゃ地面に叩きつけられる！」
「ひょっとして死んじゃうの?!」次話。「死」目覚めたキリンを待ち受ける本当の現実とは?!

死（前書き）

相棒は天空のあなたに消えた。天使の羽が抜け落ちて、まっさかさ
まに落下するキリン。はたして地表との激突に耐えられるのか？！
目覚めたキリンは衝撃の悲しい事実襲われる！

死

「ゴツっ！！！」

何かが頭に当たってふと我に返った。

天使の羽も、宇宙も、何もかもが消え去って、目の前にはただ火の海が広がるばかり。

今まで見ていた風景はあとかたも無くなってしまった。

ゴツリとぶつかったのは相棒のキリン？。

ずいぶんと変わり果てた姿になっている……。

アーマーのスチールは高温で熱せられ、オレンジ色の球になった。まさにオレンジ。夏ミカンだ。

コントロールセンターでの大爆発。

彼はあの凄まじい熱と衝撃をもろに受けてしまったらしい。

「ひょっとして、死んでる？！」

俺はプラントの片隅で転がっている夏ミカンに飛びついた。

「おい、しっかりしろ！！！」

「おきろっ！おきてくれっ！！！」

ごろごろ、ごろごろ、と肩をゆすりながら懸命に声をかけた。

3回ほどアーマーをゆすったところで、夏ミカンはうっすらと目をあけ、話し始めた。

「相棒。もう先に行ってくれ。」

「間もなくここはドロドロの熱いマグマで一杯になる。」

「地獄が俺たちを飲み込むだろう。」

「そつなつたらお終いだ。」

後ろには灼熱の炎が立ちのぼる。
そして、何か異様なものが「じゅっ」。と音を立てながら迫り来る気配を感じた。

「お、俺はもう駄目だ……。」

「自分でもわかってる……。」

「さあ……行ってくれ。」

「お前の海はもうすぐそこだ……。」

蚊の鳴くような小さな声で、キリン2は言った。
でも、俺は認めなかった。

キリン2への爆発する思いが込み上げてくる。

そして、伝えたくて、伝えたくて！上ずった声で、叫んだ！

「馬鹿野郎！！冗談じゃねえよ！！！！」

「ここまで来たんだ！！一緒に行くんだろっ！！」

「海はもうそこじゃねえか！！」

「俺たちは仲間だ！」

「なっ！」

「そつだろ！！」

「そつだと言ってくれっ！！」

「お前だけ置いてくなんて、できねえよおっ！！」

俺のひきつった変顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった。
それを見たキリン2はうつすら笑みを浮かべながら答えた。

「もう、十分やったさ……。悔いはない……。」

手足がもげ、アーマーにポツカリと4つの穴が空いている。本当にただの丸い球体となったキリン2は、残った首のレンズ越しに少し安堵した表情を浮かべた。安らかな顔立ちで、彼は静かに目を閉じる……。

「悔いは無いって、なんだよっ!!」

「おい！眠るな!!」

キリン2の魂が広大なサバナを軽快にかけ回る。

そんな様子をふと想像してしまった。

「故郷に帰ってしまったのか?!」

「まだ、早すぎるぞ!!」

俺は何とか魂を呼び戻そうと、震える声で叫び続けた。小さな爆発はまだまだ俺達を襲い続ける。

横から、上から、まん前から。

極めつけはドロドロの核燃料。じわじわと後ろから忍び寄る。

「流石のアーマーもこれには耐えられない……。」

そう直感的に察した。

「行くぞ！ほら立て!!」

「今、行かなくちゃ手遅れになる!!」

「一緒に海に行こう!!」

「バカンスするんだろっ?!」

「キラキラのお日様が俺たちを待ってるさっ!!!!」

アーマーの損傷。それはキリン2の死を意味していた。

ホールボディカウンター。ガイガーカウンター。両方のメーターは振り切り、もはや計測器としての意味を失っていた。見えない弾丸を放ちながら、”ヤツ”は装甲の中に入り込む。そして相棒の体内で遺伝子をつたづたに引き裂いていく。やがてキリン2の鼻から血がタラリと流れ落ちた。

「マジっ!!!!!!」

「ウソだろっつ!!!!」

滝のように流れる涙で目の前が何も見えない。

「しっかりしろっ!」

「しっかりしろよおおおおお!!」

叫び声がむなしく炎の中にこたました。

何度も何度もゆすって、こついで、してみたが、もう全くの無反応だ。

彼は静かにまぶたを閉じたまま、あの間抜けな笑顔を見せる事も、返事を返してくれる事も無かった。。。。

「あの時の夢はこれだったのか?!」

「天使の羽根はこいつの死を意味していた?!」

夢の中で俺は天使の羽をもぎ取られ、地上に転落していった。現実の世界に呼び戻されたんだ。

こいつはそのまま上昇し、天に召されてしまった。。。。。。まさに予知夢だった。。。。

「こ、これが死。俺達の死。。。。。」

ぐったりとゴム人形のように横たわるキリン2を見ていると、
何だか背筋に冷たいものが走った。

「あの天国は何だったのか?!」

「羽を付けて飛んだパラダイス……。」

「なんで!なんでこんな事に!!!」

ラーメン屋のアルバイトが店長にド叱られた時のように
俺は力んだ変顔になって、叫んだ!!

「悔しいですっつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ウルウルのまん丸黒目からとめどなく涙がこぼれる。

俺は歯を食いしばり曇った空をみあげながら

「負けないぞ!」

そう心に誓った。

死（後書き）

生まれてきたものは必ず死ぬ。生き物の致死率は100パーセントだ。だからって、何も今こいつが死ぬこと無いんじゃないか？！澄みきった海を眺めて、一緒にバカンスするはずだったのに！再び爆発の中で目覚めたキリン。はたしてこの地獄を抜け出せるのか・・・

そして海を見た（前書き）

キリンは相棒を失って独りぼっちになった。

でも、諦める訳にはいかない。未来はきつと開けるから。

キリンは走る！あの有名な誰かさんのように・・・。

「一生懸命走ってたのって、メロンだっけ？！何だっけ？！」
走る！走る！走り続ける！

あいつの為に！いや、亡くなった尊いすべての命の為に！

そして海を見た

俺は走った。狭いプラントの通路を。
キリン2の亡骸をおいてけぼりにして……。

「おいてけ〜。」

「おいてけ〜。」

「釣った魚おいてけ〜。」

どこかのお堀のように、後ろからしつこく炎が追いかけてくる。

「俺のアーマーまではぎ取るつもりか?!」

「そうは問屋が卸しま1000円!」

真っ赤になって降ってくる金属の雨。

ボルトやらナットやら、ありとあらゆるものが高温の弾丸になって飛んでくる。

足元の地面は割れてガタガタだ。

イガイガに突き出たコンクリートが4本の足にまとわりつく。

「シャキン! シャキン!」

無数の傷跡がアーマーに刻まれる。

まるで鋭利な刃物で何回も切りつけられているようだ。
それでも俺は懸命に走った。

「止まるわけにはいかない。」

「相棒の死を無駄になんかできない。」

そう心に誓ったから……。

「あいつの分まで生き抜いてやる！」

「絶対にあきらめない！信じれば夢は必ず叶う！！！」

キリン2はもうこの世には存在していない。魂もない。

亡骸すら“ヤツ”の熱ですっかり蒸発してしまった。

マグマに気体。

“ヤツ”は変幻自在に姿を変え、全ての生き物を死に追い立てる。

今、この瞬間も異様な臭気を漂わせながら後ろからどんどん俺に迫りくる。

炎よりも早く、周囲に邪悪を撒き散らしながら……。

目の前にはプラントの残骸とボロボロになったコンクリートのビル。

そんな光景が延々と続く。

行けども行けども炎の海と死の灰。

潮の香りがするどころか、海の気配は全く感じられない。

アーマーは全くの無反応。スクリーンには進むべき方角が点滅するだけだ。

まったく変化しないこの状況にさすがの俺も心が折れかけた。

「もう駄目か……。」

よるめく足はドンドン重くなる。

天国に召された親友キリン2。

原発内部で戦い死んでいった2本足達。

さっきまでの出来事が走馬灯のように駆け巡る。

「俺は死んでしまうわけにはいかない……。」

「俺は生きてこの事実を伝えるんだ！」

「生きて生きて生きまくってやるんだ！！！」

「何としてもここを出てやる!!」

勇気と力を振り絞って俺は走った。走り続けた！
多分あいつと同じ心境だ。

邪知暴虐の王に友人を人質に取られながら走り続けたあいつ。

「そう、メロン。」

「うんっ?」

「いや、エロス。」

違う。それを合わせて2で割った彼。

「メロス!!!」

彼も自分を信じてくれる誰かの為に走り続けた。

「何かの為に……。」

「誰かの為に……。」

そんな思いは自分を強くする。

まったくもって純真な心だ。

後方陣地の安全地帯で自己保身の為だけに生きているお偉い奴らに
俺は叫んでやった!

「最前線の所長はボロボロになって倒れたぞ!」

「食道ガン!!!」

「見えない弾丸にやられたんじゃないのか?!」

「なんで事実を隠すんだ!!!」

こみ上げる怒りをバネに、俺はまた勇気を取り戻し走り出した。

倒れた鉄骨のガラクタをくぐり抜けると信じられないほど視界が開けた。

待っていたのは見晴らしのいい平らな場所。

駐車場か何かのようだ。さかさまになった自動車が見える。

障害物の山を超え、俺はぐんぐん速度を上げていく。

すると燃え盛る建屋がだんだん小さくなって、相棒との思い出もどんどん薄らいでいく。

その時、誰かに呼ばれたような気がして、ふと後ろを振り返った。

「頑張れ……。」

あいつの顔が空一杯に浮かび上がった。

俺は涙をこらえながら走った！

走って走って走り続け、やっとの思いで外部電源プラントまで到達する事ができた。

「なんだ、こりゃ?!」

「水びだしじゃないか!」

俺は叫んだ!

「電気と水は一緒に置いちゃ駄目だ!」

「電源はもつと高い所に作るべきだろっ!?!?!」

昔よく言われていたのに

「ぬれた手でコンセントを触ってはいけません……。」

って。

復水器からは冷却水が勢いよく噴出している。

漏れだした汚染水は少し粘り気を帯びてアーマーにまとわりついた。それでもめげず、粘りつく水滴を振り切って、俺は前だけを見て走った。

「エイッ！」

トレンチを軽快に飛び越えると長い長い放水路が見えた。発電に使った排水を海に捨てる水路だ。

「ここに沿って進めば間違いないだろう。」

「もうすぐだ！」

「海は近い！」

そう感じた俺の足は羽根が生えたように軽くなった。

「もう少し！もう少しだ！」

俺は自分で自分を励ましながら最後の力を振り絞って走った。すると、遠くに薄っすらと青い一本の線が見えた。青い線は徐々に太く長くなって、目の前に水平の帯が広がった。帯は広がる。どんどん広がる。

やがて大きな水面が顔をのぞかせ、雄大なパノラマが目の前に広がった。

「海だ！」

「海に来たんだ！」

「憧れの海！」

俺は遂に海へとたどり着いた！

見渡す限りの水平線。母なる海が目の前に広がる。

360°のオーシャンビュー！

「なんてデカイんだ……。」

目の前に現れた見たこともない光景に圧倒され、俺は一瞬言葉を失った。

でも、なんだかとおつても気持ちが悪く楽になって、今まで遭遇した耐え難い出来事をすべてチャラにできてしまったくなつた……。

第3章 完

そして海を見た（後書き）

やっとのことで海に着いた麒麟。この先どうする?! バカンスは良いけど、まだまだなぞが残っているゾ。第4章「海」で大海原を舞台に麒麟の新しい冒険が始る! 今までの謎が次々と明らかに!

犬（前書き）

やっとの思いで海にたどり着いたキリン。

でも、のんびりバカンスって訳にはいかなかった。

それならまだまだやっっちゃうよ！

さあ！アーマーを付けたキリンの新しい冒険が始まる！

犬

第4章 海

く 犬 く

やっとの思いで憧れの海までたどり着い俺は抜け殻のように立ち尽くし、

じーつと海を見つめていた。

放射能くさい潮風がヒューツと首筋のあたりを撫でる。

後ろでは灼熱の炎が真っ赤な地平線を作り、前には紺碧の水平線。

そして俺は赤と青のちょうど真ん中にある変なキリン。

そのボディは淡い紫色に輝いて、まるでクリスマスツリーの飾り玉のよう。

雄大な風景の装飾品として以外にマッチしていた。

「こ、これが海か……。」

まっすぐだ。そしてデカイ。

空と水の境目が、東の方角すべてを上下真っ二つに分ける。

まっすぐ、まっすぐ、どこまでもまっ平らだ。

それ以外、視界に入るものは何も無い。

「しかし、よくもまあ抜け出せたもんだ。」

考えるより先に言葉が口をつく。

俺たちにプロگرامされていたミッションはあの爆発地帯でゲームオーバーのはずだった。

しかし、何故かここまで来ることができた。

だからこれだけは自分の意思だとはつきり言い切れる。

「俺が望んだんだ！」

「やっぱり操り人形じゃなかった！」

「あこがれの海。海にたどり着いたんだから！」

でも、現実の海は想像していたパラダイスとはかけ離れていた。真っ青に抜け切った青空は見せかけで、死の灰があたり一面を覆っている。

一見、澄み切った青に見える水面。実はこれも嘘っぱち。

ガイガースクリーンを透して見ると全面濃い紫色。放射能だらけだ。

「死の海か……」

絶望にも似た感覚が心を包みこむ。

それでも海水に触れてみたくなった俺は防波堤を飛び越して、海の中へ入ってみた。

この前、川に浮かんだのと同じ要領だ。

足を折りたたんで、ひれを出し、どんぶらこ。どんぶらこ。

波にさらわれ、沖へ、沖へ。東へ、東へと流されていく。

するとまっ平らだと思っていた水面がわりとゴツゴツしている事に気付いた。

トラックにバイク、見覚えがある色んなものが浮いている。

ありとあらゆる陸地の物体が水面を埋め尽くす。

海に引き込まれた陸地の文明は、なんだかちょっと寂しそう。

お互いに身を寄せ合って丸くなり、ポチャンポチャンと波間を漂っていた。

「ピーッピーッピーッ……」

警告音が鳴り、スクリーンに何かが映し出された。
人間の家だ。三角お屋根のモダンな家。

「うんっ?! 生命反応?!」

アーマーはそこに小さな動く物体を捕らえた。

「何だあれ? 魚?」

ずいぶん毛の生えた魚だなと思っていると、動く物体はズームされ、
正体がハッキリ確認できた。

「犬!!」

ぶかぶかと浮いている一軒家の屋根に小さな室内犬が尻尾を振りながら乗っかっている。

子犬は穴に落ちまいとヨロヨロ、ヨロヨロ。フラフラ、フラフラ。
ところどころ瓦が落ちて穴が開いた屋根の上をおぼつかない足取りでウロウロするばかり。
危ないっいたらありゃしない。

「キャン! キャン!」

俺に気が付いたのか、こっちを向いて愛おしそうに泣き始めた。

「よし、待ってる、今助けに行くぞ!」

俺が犬を救助しようとヒレをバタバタ動かしたその時!
大空で何かがキラリと光った!

「鳥か?! 飛行機か?! タケちゃんマンか!!!」

たじろぐ俺を無視して、飛行物体は天空から真つ逆さまに急降下してくる。

お日様を背中に背負ってまぶしく輝きながら、こちらに突っ込んできた。

接近は間近だ!!!

スクリーンに鋭い目をした猛禽類のシルエットが表示され、

“Warning!”の文字が点滅する!

「あ、危ない!」

息をつく暇もなかった。

鋭い鍵爪がキラリと光ったその瞬間、小さな子犬はまさに「驚」に

「ワシ」づかみにされ、

死の空高く消滅していった。

「.....」

啞然.....

啞然とはこんな感覚。俺は知っている。

前にもこの「啞然」を体験した事があったから。

事実を目の当たりにした今回とはちよつと違うけどネ。

それは“ヤツ”が爆発した時の啞然だ。

目じりの垂れたメガネおじさんが、バイクを配っておけと要求したにも関わらず、

利権者達は見ても見ぬふりをした。みんな逃げたかったのに、誰も何も出来なかった。

「直ちに影響はありません。」

公共放送はそう繰り返したし、とろんとした目つきのおじさんは何も決断しなかった。

まさにア・ゼ・ン。啞然……。

俺は下顎が外れて、ガーンと地面に落ちそうになった事を明確に覚えていた。

「死の灰が降ってくるんですよ！」

「よもぎが産地の痩せた寒い大地で同じ事が起こったでしょう?!」

「子供達はガンになって、お母さんのおなかの中で胚芽期の命にトンでもない被害を与えた。」

「マツの森が真っ赤になって、人っ子一人住めなくなったじゃないか！」

「あれが降ってくるんですよ!!」

「何故、人々を逃がさない?!」

「何故、仲間を危険の中に放置するんだ!!!」

あの時の啞然と今の啞然。

どちらも啞然だが、あの時の啞然の方がよっぽどタチが悪い。

みんな信じてた。何かを信じてた。

だから世界に誇れる性質を發揮し、パニックも起こさず、暴動も越こさず、

この国の根っこを守り抜いた。

勇者達は命令に従い、1億の何万倍も放出された死の灰の中に突入した。

エネルギーを守る現場の技術者は、自分を捨てて“ヤツ”と戦った。

「哀れだ……。」

この国にもっと勇氣あったなら、あんな事にはならなかったのに。

この国に我欲に駆られた亡霊たちがいなければ、あの2本足達を救えたのに。

俺は分かったた。だから！

「やばいって、それ！！！」

と心の中で何度も繰り返した。
でも利権者達の答えはこうだ。

「直ちに影響はありません。」

「安心してください。」

「原発の今の様子です。」

「安定しているように見えます。」

「安心してください。」

啞然……。

あの時の異様さを思い出しながら連れ去られて行く子イヌをじっと見つめた。

まさに2つの啞然が混ざり合った劇的な瞬間だった。

イヌが連れて行かれ、食べられる。

食物連鎖。強いものが弱いものを食うアレだ。

生き物は食うために命を奪う。

でも、あの時は誰も何も食わなかった。

ただの殺し。

見えない弾丸で殺しまくった。

今、目の前で起きた事とは全くの別物だ。

人間の言葉の中に「イヌ死に」ってのがある。

何のことが分からないまま、死んでも、死ななくても、どっちでも良かった死の事らしい。

「誰もイ又死にさせたくない！」

「もうこれ以上、命を失いたくないんだ！」

「勇者達も！人々も！何もかも！」

「だから戦う！」

「絶対に諦めちゃいけないんだ！！！」

俺はぐつと涙をこらえ、奥歯をギシギシさせながら叫んだ！

空を見上げると驚づかみにされた子イ又が灰色の雲の中に消えていく。

残されたのは一軒家と瓦礫の塊だけ。

そこに生命反応はもう無い。

無機質な物体達がチャプツチャプツと音をたてながら、ゆらゆら波間を漂っている。

哀愁にくれた俺のキュートな真つ黒ク口目から、またもボロボロと涙がこぼれ落ちた……。

犬（後書き）

犬が死んだら犬死。

人間が死んでもイ又死に。

もう誰も死なせたくない！

いい加減目を覚ませ！人間達！

サメ（前書き）

キリンは海で犬と出会った。まったく海には色んな生き物があるもんだ。ドンブラコ、ドンブラコと東へ進むキリンさん。次はどんな出会いが待っているのか？！

サメ

天高く消えていった犬を思い出しながら東へ流され進んでいく。
ドンブラコ。ドンブラコ。

真っ青な海にポツンと一つ浮かんでいる俺のその姿は、
お日様の光を浴びてキラキラ輝く真珠玉のよう。

遠くに見える水平線をボケ々と眺めながらほっと一息、気を緩めた。
すると、

「コンコン。トントン。」

腹の下のほうで何かが俺をつついていているようだ。

「カンカン。コンコン。」

突っつきは一向にやむ気配もない。

「なんだ！むずがゆいなあ！」

俺はなんとか無難にやり過ごそうと気づかないふりをしていたが、
カンカン、コンコンとあまりのしつこさには、ついにはびれを切ら
してしまった。

たたんだ足の一本をヒョイツと伸ばし、海中を無作為にぐるぐるか
きまぜてみる。

「ゴツン！！」

何かを蹴飛ばした感触が足に伝わった。

「ビンゴ！」

「一撃必殺！！」

ちよつと嬉しくなつて、思わずほくそ笑んでいられたのもつかの間だった。

目の前の海面が急にモゴモゴツと隆起し始め、白波立てながら海が半分に切り裂かれた。

その真ん中から、とがった三角形が突き出しはじめた。

「はい。また変なもん出ました。」

あーあ、と俺は少し呆れ顔になった。

三角形は青から白へとその色合いをグラデーションさせながら相似状にどんどん大きくなっていく。

先端から海水が勢いよく流れ落ち、まるで山あいの岩場にある細い滝のよう。

「あれっ？海にも滝、あるの？」

と目の前の出来事がよく理解できてない俺は、

いつもと同じく頭の上にはてなマークを何個も作つて、首をかしげるしかなかった。

しばらく呆然と見ていると三角の色あいが大きく変化した。

今度は青から赤。

まるで真紅の絨毯で目の前が覆われたように視界が真っ赤になった。その絨毯には模様があつた。紅の背景にきつくコントラストを作り出して

白く尖つた下三角がピカピカ列をなして光っている。

ピカピカ三角達から零れ落ちる海水のしずくは、まるではじけた炭酸ジュースの泡。

スパークリングレッドワインのようだ。
突如海に現れたシャンパンタワー!!

「ビューティフル!」

思わず目の前の物体にスタンディングオベーションで拍手を送った。
するとスクリーンにその物体の正体表示された。
情報が下から上へと流れ出る。

ホホジロザメ(類白鯨、Carcharodon carcharias)

・ネズミザメ目ネズミザメ科ホホジロザメ属

・体長4.0-4.8 m 体重680-1100 kg

・最も危険なサメ。世界中で死傷事故が発生。

・体長8 m、体重3000 kgを超えるような個体が生息している可能性もある。

208

「サメ?!」

「サメってあの凶暴なやつ?!」

「体長8 m?!」

「もつとデカイだろっつ!!コレっ!!」

そう言えばあの日以降出会った生物達はどこがおかしかった。
いびつだったり、血を吐いていたり。

このホオジロザメも”ヤツ”によって巨大化してしまったのか?!
昔もいたゾ。デッカイの。確か水爆実験に巻き込まれたんだ。

「名前はゴリラ!」

「いや違う!ゴジラだ!」

死の灰によつて巨大化した爬虫類。

1940年代後半から50年代、太平洋の美しい環礁で何度も何度も核実験が行われた。

そしてついにあの事故は起きた。

広島原爆の1,000倍のウルトラ水爆「ブラボー」の爆発。

イタリア語で素晴らしいを意味する「ブラボー」だったが、

起きた事故はぜんぜんブラボーじゃなかった。

どちらかといえばイタリア語で最悪を表す「ペッジョ」くらいにするべきな惨劇だった。

死の灰に巻き込まれた漁船事故。そして

安全宣言を信じて戻ってきた住民の異常出産、甲状腺ガンや白血病。あの時の事を忘れないために

「核の落とし子」「人間が生み出した恐怖の象徴」「ゴジラは日本に現れた。」

愚かな2本足が生み出した核によつて怪獣にされてしまった彼は、結局、身勝手な2本足の手によつて葬られてしまう事になるのだが。

「ふっ、勝手なやつら……。」

「もう。」

「勝手にしやがれ！」

壁際に寝返り打つて背中中で聞いている2本足のオスの歌が頭の中で何度もリピートされた。

そしてまた、死の灰を撒き散らしてしまった2本足達を哀れみながら俺は叫んだ！

「あの漁師さん達の事などすっかり忘れちゃったの?!」

「マーシャルの人たちの事も?!」

「今度は世界中の加害者になったんだよ!!!」

「あゝあ。あゝあ。あゝあゝあーあああああ。」と

さびの部分でジュリーの歌声がこだまする。

「ガツチン!!」

「うわあっ!!」

「また噛まれた!!!」

「俺、まだ、死にたくないんですけど!!」

強烈なサメ一撃でふと我に返った。

「キリン食わないだろっ! なっ!」

「俺はおいしくないよあゝ!!!」

叫び声がむなしく水面に響いた。

そんな叫びはお構いなしに、ホホジロサメは凶悪な大口を開け俺に襲いかかる。

「ひええええゝ!!!」

「ガツキンツ!!」

サメは銀色に光る金属の装甲にかぶりついた!

口元からは海水とよだれに交じって金属粉が銀色のラメとなっ
てこぼれ落ちる。

「イテツツ!!」

「ちよつと、ちよつと! 削れてんじやない?!」

俺が一瞬ひるむと、すかさずサメが噛み付いてくる。

「ガチン。ガチン。」

何度も何度も歯がぶち当る。

俺もさすがに不安になって、手足をバタバタと振り回し何とかサメを追い払おうとした。

目の前で”Warning”の文字が点滅する。

「バキッ!!!」

大きな音がして、テレビを引っ掛けていた鋼鉄製のフックがもぎとられた。

「あれれ、ちょっとやばくない?!」

「と言うより、これはマズイ!!」

そう思った瞬間、何やらアーマーが変形し始めた。

金属製の細長い腕がヒュルヒュルツと胸元に引っ込んで格納されていく。

次の瞬間、

「ピュルルルウー!ー!ーッ!!!」

という気色の悪い大きな音が発せられ

腕が引っ込んでいった穴から強烈な光線が放たれた。

当たりは一瞬にしてその強い光で真っ白になる。

光線はサメに向かって一直線に突き進んだ。

光は七色に変化しながら虹のように輝いて何本にも細かく分裂していく。

そしてついにホホジロザメの頭部を貫いた!

強烈な光とともにほのかな熱が感じられる。

「ウイ~~~~ンツ!!」

唸りを上げて胸元の穴が回転し始めた。

すると光線も放射状にくるくると回転しながら、

長い光のサーベルとなってサメの体をバラバラに切り刻んだ。

まるでフードプロセッサーに入れられたお肉のよう。

ズタズタ、ボロボロのミンチになったサメは、静かにゆっくりと海中へと沈んでいった。

その悲しい風景とは対照的に、空へと放たれた虹色の光線は、まるで野外ライブの演出のよう。

あたりを虹色の世界に包み込んでいく。

「なんて綺麗なんだ・・・。」

光の世界は俺をファンタジーワールドに迷い込ませ、メルヘンの世界にいざなっていく。

俺の気分が最高潮となって、心地よい空間に心を奪われそうになった時、

スツと音もなく光が止み、辺りはもとのうす曇りの海に戻っていった。

くらんだ目パチパチしながら瞳を凝らしてあたりを見回す。

そこにはドデカいホオジロザメの姿はもう無く、

辺りにはなんとも食欲を誘う焼き魚の匂いが立ち込めていた。

波間には、所々に切り裂かれたサメの肉片があぶり焼きになって浮かんでいる。

するとどこからともなく沢山の小魚たちが集まってきた。

口をパクパクさせながら、サメミンチをおいしそうに食べ始めた。

まさに丁度よいまき餌。

普段はサメが小魚を食う。でも、今は逆。小魚がサメを食っている。

「俺ってひょっとして、余計なお世話をしちゃった?!」

サメが食われる。サメも食われる。

でも、小魚は食っただけ。

サメも普段は食ってるだけ。

この世界では、適応に優れた遺伝情報のみが残される。

食って、生きて、子孫を残す。

これが進化であり、生態系だ。

目の前に描き出された海面の状況は、まさに俺達生き物の性を如実に表現していた。

「ただの殺しにならなくてよかった……。」

キリンは複雑な気分に見舞われたが、なんだか少しだけホッとさせられた。

サメ（後書き）

もう忘れちゃったの?! マーシャル諸島で何があったのか?!

「犬」「サメ」次には何が来る?! 東に向かうキリンさん。

太平洋の真ただ中で新しい出会いが待っている!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1181x/>

麒麟の夜明け

2011年12月24日12時46分発行